本田財団レポート　No.159
第135回 本田財団懇談会（2015年9月10日）

「中東、アラブ、イスラムの世界、そこが知りたい　アラブ世界の理解への挑戦」

東海大学国際教育センター　准教授

Abdalla El-Moamen（アブドーラ・アルモーメン）

公益財団法人 本田財団

講師略歴

Abdalla El-Moamen（アブドーラ・アルモーメン）

東海大学国際教育センター 准教授
（専門：対照言語学、異文化コミュニケーション）

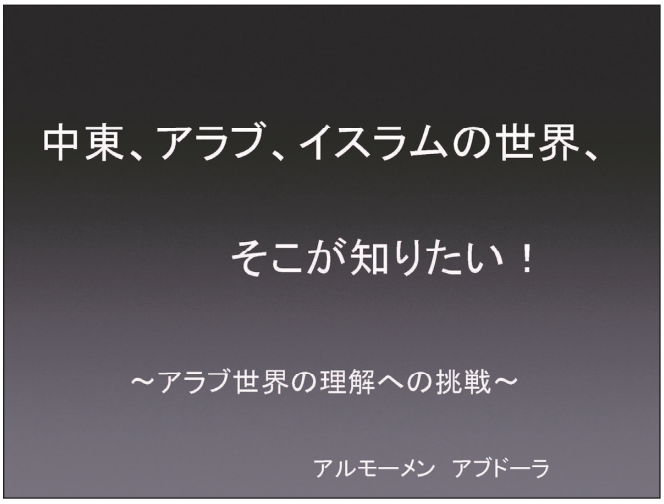
《略　　歴》

エジプト・カイロ生まれ。2001 年学習院大学文学部日本語日本文学科卒業。同大学大学院人文科学研究科で、日本語とアラビア語の対照言語学を研究、日本語日本文学博士号を取得。元 NHK テレビ・アラビア語講座講師、NHK・BS 放送アルジャジーラニュースの放送通訳のほか、天皇・皇后両陛下やアラブ諸国首脳、パレスチナ自治政府アッバース議長などの通訳を務める。元サウジアラビア王国大使館文化部スーパーバイザー。

《主な著書》

２００４年	『アラビア語が面白いほど身につく本』（中経出版）
２００６年	『読める書けるアラビア文字プリント』（小学館）
２０１０年	『地図が読めないアラブ人、道を聞けない日本人』（小学館）
２０１５年	『日本語・アラビア語の慣用的慣用表現の対照研究-意味分類と概念特性を中心に』（国書刊行会）

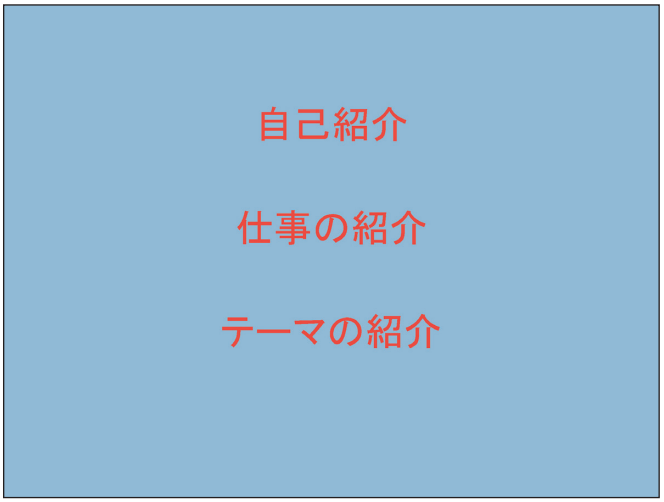
ほか



こんな大雨の中、来ていただいたことを非常にうれしく思います。もし、これがどこかのアラブ諸国だったら、たぶん、誰も来なかったと思います（笑）。日本でよかったと思っています。

さて、先ほどいろいろご紹介いただいたように、私はちょっと分かりにくい経歴を持っているので、私はどういう人物か、少しお話させていただければと思います。

■ 私の経歴



図－1

〈図－1〉　私の出身はエジプトです。日本に来てから満 20 年になります。1996 年初頭に留学生として来日しました。最初は 1 年で帰る予定でしたが、なぜか 20 年。ちょっと伸びすぎて、もう、戻れなくなってしまっている状況です。ちょうど今、中東、アラブ、イスラム世界で生きた年数と同じぐらい日本で暮らしましたが、自信を持って言いますと、今は私はハーフです(笑)。本当にそういうつもりで、ハーフの立場からアラブ、日本も含めて皆さんとお話できたらと思います。

タイトルのとおり、私はあくまでもモデレーターとしてきょうは来たつもりです。皆さんがふだん、難しそうな中東、アラブ、あるいはいろいろなニュースで飛び交うこの三つの言葉につい

て、ふだん疑問に思っていること、知りたいこと、さらに確認したいことを、私がつなげて、最後にはこの三つをある程度理解していただけたらと思っています。

当然、大学の教員になるまでは長い道のりでした。というのも、外国の人が大学の教員になるのはなかなか簡単なことではありません。ご存じのとおり、日本は比率的にも外国籍の大学教員が非常に少ない国の一つです。それまでは在外公館の仕事をしたり通訳をしていました。ピンと来ないかもしれないけれども、中東の通訳というのはあまり楽しい話ではないです。だいたいドンパチの起きているところとか、それから難しい記者会見、中東和平問題など、通訳としてはあまりそこにいたくないものがたくさんあるのですが、あえて私はそういうところに少し自分の得意の言語を生かして、今まで 20 年の間に、日本とアラブ世界全体の間で言葉を軸にいろいろな仕事に関わってきました。

そして現在、東海大学で何をしているかというと、たぶんきょうのテーマからすると、私が東海大学では中東とかアラブについて教えているというような話になってしまいますが、そうではありません。私は日本研究者として大学で教えています。もちろんアラブ文化論といったものも含めてやっているのですが、メインは言語学です。私の研究は言語と人の社会思想、あとは翻訳論です。それから大学で日本語の教師になりたい学生を相手に、言語対照研究とか、そういったものを語っています。

タイトルにあるアラブ世界の理解への挑戦ですが、今、アラブ世界はどの程度、理解されているのか。あるいは、もはや理解できない状況になってきているのか。なかなか難しい状況です。正直、私自身もあまり分からなくなってしまいました。こうした講演に来る度に、どのような話をしたらいいのかと思ったりします。というのも、中東を語っていくためにはいろいろな背景を語っていかないと理解するのがなかなか難しい。そのような地域なのです。

私が今までどういう仕事をしたかという先ほどの話につなげていきますと、アラビア語講座というものがあります。2003 年に、やっと日本がアラビア語講座を作るという話になった時に、そこの創立メンバーに入って 2009 年までさせていただきました。映像、言葉、いろいろなメッセージを発信することについてなど、たいへんいい勉強ができた仕事でした。

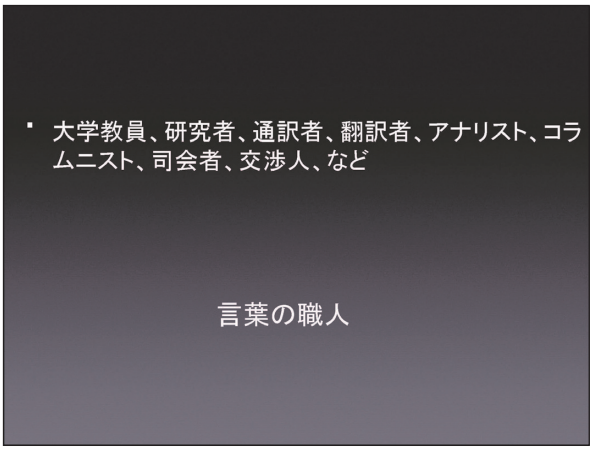
それから皆さんの、きょう手元にある資料はちょっと多いですが、これはある意味では、みんな持って帰って読んでいただくための資料です。中にある「アラブ人取扱説明書」（巻末収録）、これは 1 年半にわたり長編のコラムを書かせていただいて、後に『地図が読めないアラブ人、道を聞けない日本人』となりました。どうですか、皆さん。道を聞けますか。きょうは私もしっかりとここにたどり着くのに人に聞いて来ました。地図を持っていても、人に聞いて確認するのがアラブ人の一つの行動パターンの基本です。皆さんの手もとにあるコラムには「アラブ人取扱説明書」と書いてありますが、読んでいただければ、実は隠れ日本人取扱説明書も併せています。これはおかげさまで、大学やいろいろなところで使っていただいています。

仕事の話に戻りますが、私はこのコラムを考えた時、基本的に私は板挟みの立場です。両方、理解はしているのだけれども相互には理解し合っていない。どうやってつなげていくか。言葉を訳しても伝わらない時もあります。そうしたこともあって、何か事前にある程度、情報の面ではお互いに勉強していけば少しフラストレーションはなくなるだろうと思って、この「アラブ人取

扱説明書」というものを書かせていただく雑誌があって、後に本になるわけですが、ぜひ細かく読んでいただければと思います。

通訳や翻訳の世界というのは、人類の中ではあまり目立たない仕事なのでしょうが、役割は大きいです。今でも皆さんのところに伝わってくる情報、特に外からの情報というのは言語による役割が非常に大きいわけです。ですから、言語の力、そして言語を愛する人たちの育成というのは非常に重要なことだと思います。残念ながら、日本語とアラビア語の両方を使って仕事の中で活用している人たちは非常に少ないです。個人的には、私はパレスチナのアッバース議長の通訳をしばらくしていたので、パレスチナの問題とか、あるいはもう亡くなっていますが、私の会った人たちは亡くなった人が多いです。

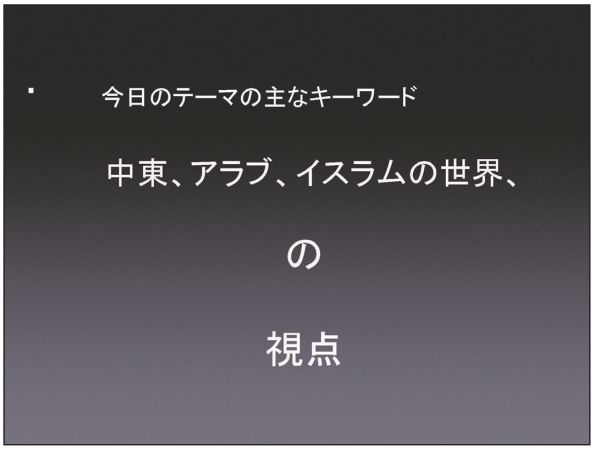
それから自衛隊がイラクのサマーワに入った時、私がアドバイザーだったり、いろいろな面でいい仕事をしてきました。最近、シリアの反政府勢力の代表が日本で講演した時は、難しい講演でした。そのような仕事です。専門分野、強みとしては応用的な部分が多いです。もちろん、論文は出していますが、そんな立派なものはあまり……。とにかく研究者としては、私は日本語を愛してやまない人です。日本語を好きか、日本が好きかと言われたら、「日本語かな」と答えてしまいます。



図－2

〈図－2〉　私は、このように大学教員、研究者、通訳者、翻訳者、アナリスト、コラムニスト、司会者、交渉人、などですが、ひと言で言えば私は「言葉の職人」ということです。そのように見ていただければと思います。

■ 風刺画に見る「アラブ世界の今！」



図－3

〈図－3〉　さて、中東は今、たいへんな状況にあります。中東という言葉を使っていいのか。アラブなのか。イスラムなのか。僕自身も使い分けたいのですが、あまりにもお互いにからみ合っているもので、なかなか分けられないところもあります。きょうの一番大事なところというのは、皆さんから質問をいただくのですが、まず「視点」という言葉をキーワードにしたいと思います。当然、私たちがこうやって東京にいながらアラブを語るということ自体は、非常に難しいことです。現地の人たちは今の自分たちの状況をどう見ているのか、その辺の視点的な部分を私が代理として伝えられたらと思っています。

図－4

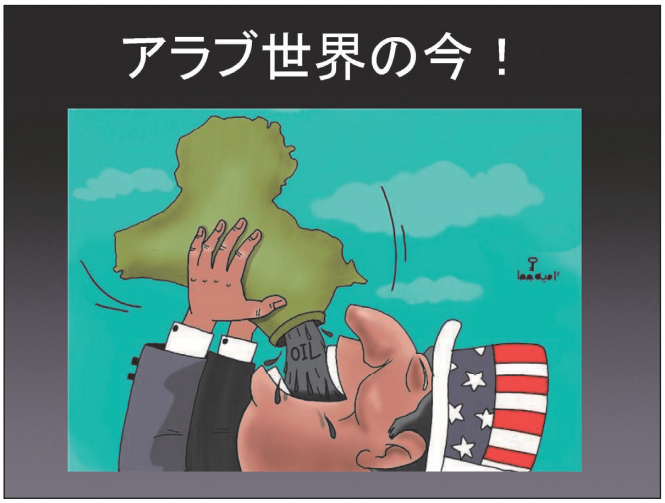
〈図－4〉　「アラブ世界の今！」ということですが、風刺画をちょっと皆さんにお見せしたいと思います。風刺画というのは、日本ではあまり多くはないかもしれませんが、アラブでは、新聞の一番中心的なメッセージです。その意味では最近の風刺画から、アラブ人は現状をどう見ているのか。1 枚目は、一番分かりやすいかもしれない。この絵の真ん中のアラビア語は、「アラブ世界」と書いてあります。アラブ世界は、周りからこの絵のようにナイフを突き付けられている。八方ふさがりという状況です。

図－5

〈図－5〉　次の絵は、風刺画なので当然、ユーモアです。アラブ人はご飯よりも笑いのほうが好きです。ご飯はなくても生きていけるけれども、お笑いなどの話がないと生きていけない人たちなのです。これはいわゆる魔法のランプで、「願い事を言ってごらん」と言っているので、「では、レバノン問題とパレスチナ問題、イラク問題、リビア問題、イエメン、シリア、全部解決しておくれ」という、皮肉な内容です。

図－6

〈図－6〉　次の絵は、真ん中にあるアラブ世界の船を 3 匹のサメが取り囲んでいます。1 匹のサメはテロ、1 匹は宗派の対立、そしてもう 1 匹は、いわゆるラジカル思想、日本で言うと原理主義でしょう。原理主義というのは、言語的にはあまり正しい言葉ではないですが。



図－7

〈図－7〉　次の絵は分かりやすいです。黄色いのがアラブ世界で、飲まれているのが石油です。飲んでいるのは……、分からないことにしましょう（笑）。

図－8

〈図－8〉　次は、これはアラブ世界です。いかにも倒れそうな、年老いたおばあちゃん。この体の部分はアラブ世界です。

図－9

〈図－9〉　おもしろいでしょう。風刺画は皆さん、見たことはないと思いますが、アイデアもいろいろあります。次の絵は、ガスレンジに鍋が乘っています。この四つの鍋が、イラク、シリア、レバノン、湾岸で、オーブンに入っているのがパレスチナです。今にも焼けそうです。

図－10

〈図－10〉　ほかにもあります。山に書かれている言葉は「対立」です。バスがアラブ諸国。アラブ人を乘せたアラブ諸国のバスが分裂しようとしています。

図－11

〈図－11〉　次はわりと最近のもので、元は世界に衝撃が走った写真です。シリア難民の 3 歳の子ども、アイランちゃんが打ち上げられたという絵ですが、これも風刺画になっています。願いとして、助けられればという意味なのでしょう。

図－12

〈図－12〉　これがアラブ世界です。22 の国なのですが、今、見ていただいたとおり、分裂、混とんとしている状況、それからあちこちで戦闘が起きています。アラブ人という言葉は、使い方としては正しいかもしれないです。いわゆるアラブ国民、国民という言い方は正しくないかもしれない。後ほど、そこは説明します。この 22 の国の一般の人たちは、かなり絶望を感じているという状況です。

■ 現代のイスラム教徒が抱えるダブル・スタンダード

中東、アラブ、イスラムはどうでしょう。皆さんは実際に今日、ここに足を運んでいただいて何か知りたいことがあると思いますが、どうでしょう。皆さん、何かありますか。

参加者：直接、イスラムの方とお話することがあまりないのですが、例えば戦争の時にイスラムの方はすごく勇猛な方が多いようなイメージを受けます。われわれ日本人は、例えば死ぬと、行いによって天国に行ったり地獄に行ったりとかありますが、イスラムの方は亡くなった後には、生まれ変わるとか、次の世界があるとか、そのように信じていらっしゃるのでしょうか。

ありがとうございます。とてもいい質問ですね。

おそらく自ら死にたいと思う人はあまりいないと思うのです。どんなに宗教的な気持ちがあったとしてもです。きっかけはいろいろあると思います。それが今の状況だと、本来のイスラムの教えに適合するかどうかは分かりませんけれども、これは死ぬことが正しいか正しくないかは別として、イスラム教徒にとっては、今、生きている世界が最後ではない。これは通過点なのです。当然、イスラム教徒ではない人たちには受け入れるのが難しいと思いますが、つまり亡くなった後、今度は裁きを受けるのです。裁きを受けた上で、そこから天国、あるいは地獄に入る。ということは、本来目指すべきところは今の世界ではないです。イスラム世界での教えはそのようになっているのでしょうが、正しいことは、だからと言って自ら死ぬような、自分の都合で命を落とすということは駄目なのです。

先ほどの視点という言葉がすごく大事ですし、言語というものも非常に大事なことでしょうが、日本に入ってくるニュースというのは、だいたい自爆的なものとか、それから何らかの戦闘の中で志願して亡くなったというものが多いです。イスラム教徒としては、何のために亡くなるのかはすごく大事なことです。これは基本的には、人を殺す、あるいは人の命を落とすというのはイスラム教の教えでは、100 パーセント駄目なのです。

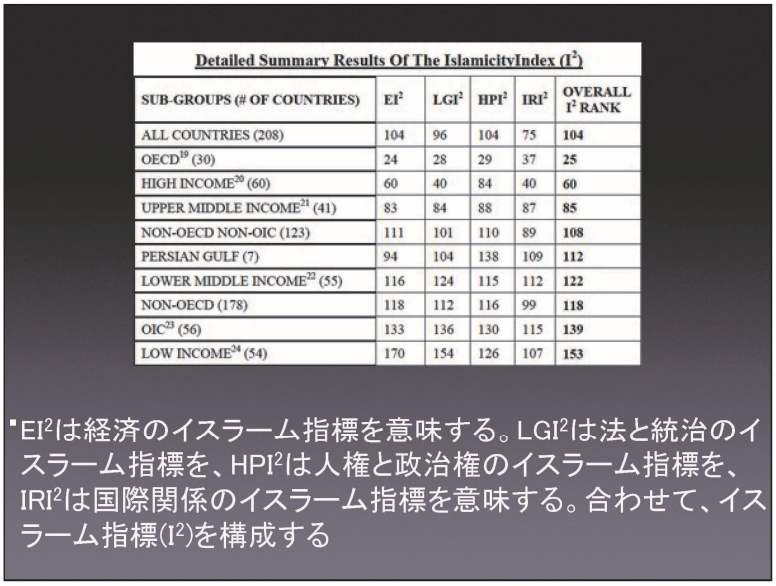
私はちょうど今年、出番が多かったのです。1 月 7 日、ちょうどフランスのシャルリー・エブド新聞社襲撃の事件が起きて、すぐに私の電話が鳴ったぐらいです。つまり解説するために出番が多かったのです。NHK の「視点・論点」に出させてもらって、カメラに向かって話す場面があったのです。イスラムというのはいろいろ語れるのだと思います。例えば礼拝はどうのこうのとか、それから豚肉とか、女性に対してとか何とか、いろいろな紹介はされるのでしょうが、イスラムの命に対する考え方とか、共同体に対する理念とか、そういったものはメディアではほぼ紹介されない。当然、私は代弁者として、弁解するようなことを強いられることがそうとう多いです。

イスラム教を理解するためには、今のイスラム教徒の状況をちょっと置いておいて、純粋にイスラム教の教えを見ていただきたいのです。イスラム教は当然、本はいろいろありますが、いろいろな本はあくまでも解説なのでしょう。コーランは何と言っているのか、そこを皆さんに紹介したいと思います。

コーランは、俗に言えば、一人を殺せば全人類を殺したのと同じようになると言っています。これはごまかすことも何も、解釈も別にいろいろあるわけではないです。つまり、相手を殺すということ自体は、何であれ、基本的には駄目だということです。もちろん、条件があります。これは例えばあなたを殺そうとするとか、あるいは危害を加えようとする人がいたなら、まずはその人を避けるということも書いてあります。どうしてもという話になった時にはそれは自己防衛するのでしょうが、基本的には人を殺すこと自体はしてはいけない。だから私たちが今見ている、イラクとかいろいろなところで自爆テロといったことが起きていること自体は、ちょっと弁解がましい話になってしまいますが、イスラム教とは考え方において何ら関係のない話です。

イスラム教徒は当然、1400 年においていろいろな解釈をして、いろいろなイデオロギーを持っているわけです。これは哲学と同じです。その一つの解釈としてコーランのある一章を抜粋して、そして自分の考え方を正当に立てるということはいくらでもあります。基本は人の命を落としてはいけない。なかなか信じられないでしょう、皆さん、どうですか。今の話は納得できますか。僕だったら、納得しないです（笑）。でも一つの納得する方法は、きょう帰ったらどこかでコーランを借りていただいて、その箇所を見る。もしそう書いてあるのであれば、間違いなく私の言っていることは正しいと思います。では、イスラム教徒は？　今のイスラム教徒はほぼ、うそ、あるいはダブル・スタンダードという状況にあります。ここも理解するのはたいへんでしょうが、正直、これが現実なのです。冒頭でも説明したように、どのように説明したらいいか、なかなか分からないけれども、本来のそうした健全な社会を考えて築くイスラム教徒というのは、少ないです。

■ イスラム的でないイスラム教徒



図－13

〈図－13〉　これを証明するデータが一つあります。よかったことは、第三者のデータなので少し納得していただけるかもしれない。つまり今のイスラム教徒というのは、偽善的な人たちです。イスラム国家とか、イスラム金融とか。イスラム金融が一番あるべきところはイスラムの国ですが、どこもイスラム金融は使っていません。サウジアラビアの一部だけです。ですから、言っていること、やっていることは、真っ向から反するのです。では、イスラム教をやめたらと言うのでしょうが、なかなかそういうわけにはいかない。やめないです。こうやってダブル・スタンダード、矛盾していることを続けるのが現状でしょう。

これはデータとしてあまり見かけないのですが、ジョージタウン大学の二人の先生が行った調査です。2010 年か 2011 年ぐらいのものですが、おもしろい調査です。

イスラム教徒が暮らしている世界の 208 の国に対して、イスラム諸国はどのようにイスラム的なのかを調査した。その国の法律とか経済、法と土地、人権、国際関係はどの程度、イスラム教の理念に則っているのか、則っていないのかという調査を行ったそうです。計算の仕方は難しくてスライドの下に書いたのですが、限りなくおもしろい正確なもので、最後には「イスラム指標」と呼ぶ単一の全体指標のようなものを打ち出しています。驚くと思いますが、この先生たちが打ち出した結果、「イスラム指標」リストのトップ 10 位の国はどこだと思いますか。

では、ちなみに世界で好きな国はどこですか。

参加者：フランス。

アルモーメン：フランス。いいですね。どうですか。

参加者：タイ。

アルモーメン：タイ、いいですね。ほかはどうですか。

参加者：スイス。

アルモーメン：北欧が好きな人は、いますか。どうですか。

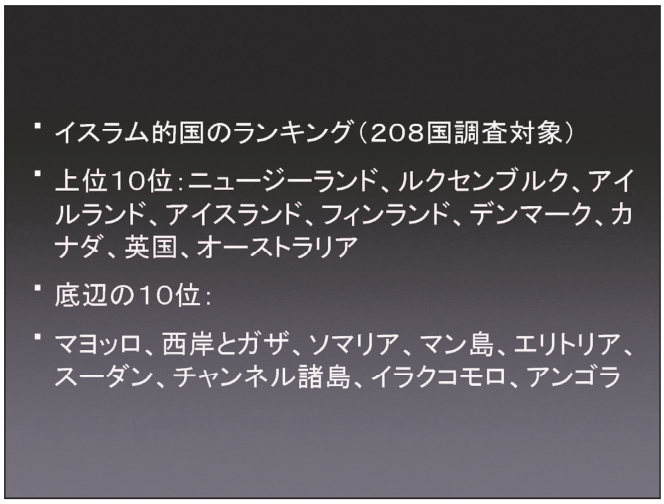
参加者：サウジアラビア。

アルモーメン：サウジアラビア、好きですか（笑）。それはうれしいけれども。

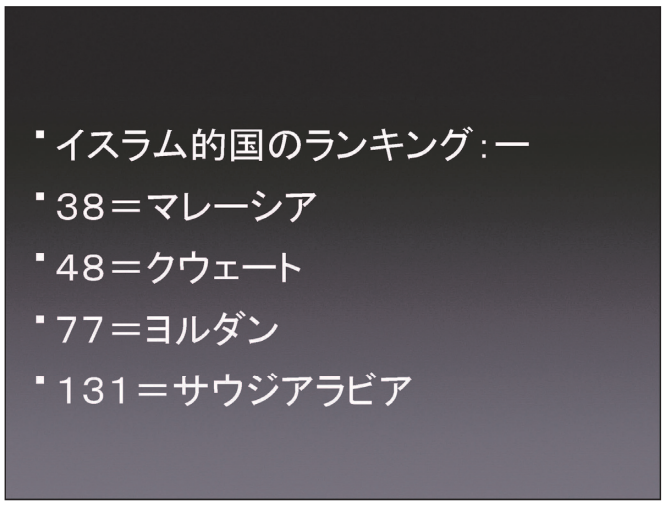
参加者：前回、行ったので。

アルモーメン：信じていいかな（笑）。

上位は、これはイスラム的ということですから、つまり国を先に説明しますが、経済、法律、統治、人権とか、そういった面でどの程度イスラム的か。どうでしょう。



図－14



図－15

〈図－14、15〉　上位、何とニュージーランドです。ニュージーランドが一番です。次がルクセンブルク、次はアイルランド、アイスランド、フィンランド……、あれ？　アラブとイスラムが入っていない。どうなっているのかという話になってしまうでしょうね。

これはフェアに何年もかけて調査が行われたのですが、幸いなことに、これはアメリカの発信したデータで、論文も国際学会で認められました。要するに私たちがとてもいい国と思っている

国は、本来ならイスラムの理念を知らないところで、イスラムという名前は付いていないのですが、結果的にはイスラムの理念と全く合致しているのです。つまり今の自称イスラム国家の人たちが真面目にイスラムの教えに則ってやれば、今頃、たぶんニュージーランド、あるいはカナダ、イギリスとなるのでしょう。

では、底辺の 10 位はどうでしょう。スーダン、ソマリア、ガザ、アンゴラ、イラク。ほかは？要するにランキング的にイスラムの国はないかという話です。何と、マレーシアが 38 位。マレーシアは私たちイスラム教徒、あるいはアラブ人にとっては非常に模範的です。それにもかかわらず 38 位です。

クウェート。これは産油国の中では 48 位。これだけ富があってもです。そして大多数が暮らしている国として、マレーシアとクウェート。調査はいろいろ分かれているのですが、大多数、国としてはクウェートが 48 位に入ります。産油国ではない、あまり富に恵まれていないうちに入るのがヨルダンです。サウジアラビアは 131 位です。

ここに一つ疑問が生じます。こうした結果を見ると、イスラム教徒が問題なのか。それともイスラムが問題なのかとなってしまいます。僕が思うに、イスラム教が問題であれば、かつてのイスラム帝国、イスラムの繁栄した時代は実現できなかったと思います。イスラムというのは最初から落ちこぼれではないのです。長い間、世界をリードしてきた文明なので、結果的には、間接的ではありますが、今、日本に伝わっている科学も、技術も、そこの原理は翻訳を通じてアラブから渡って来たわけです。今度は言葉の役割です。ですから、成功例としては実績があります。

ということになると、私からすると問題はイスラム教徒です。イスラム教ではないです。このデータを裏付ける話としては、今、私が申し上げている、自分たちイスラム教徒は、本来のイスラム教が求めるいろいろな条件を満たしていないということです。

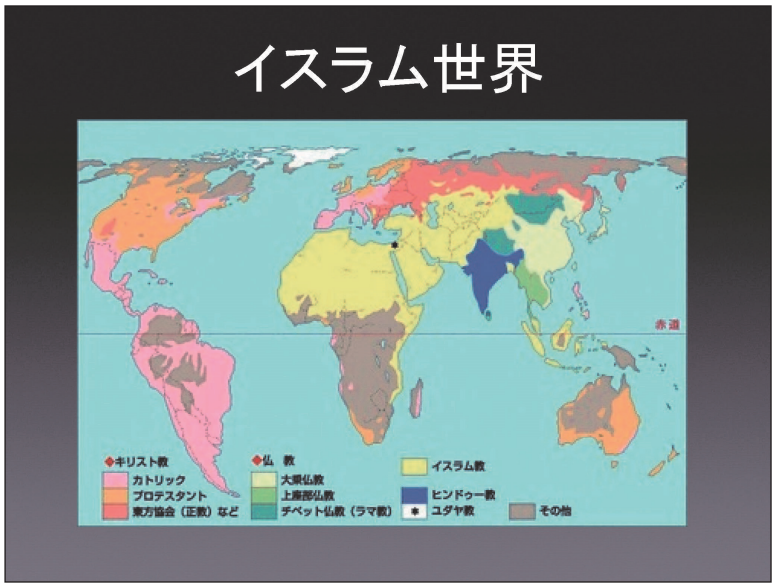
■ イスラム世界とは？

ほかの質問はどうですか。

参加者：イスラムというと、先生がお見せになった中東から、中央アジア、インドネシア、ものすごく広がっていますよね。しかし、イスラムと言ってしまうと、またアラブが見えなくなってしまうので、アラブというところに視点を置くと、特徴はどうでしょう。当然、これはインドネシアとかマレーシアとか中央アジアとは違いますよね。

ありがとうございます。違ってくるでしょうね。私が用意したパワーポイントにもある話なので、ありがたいです

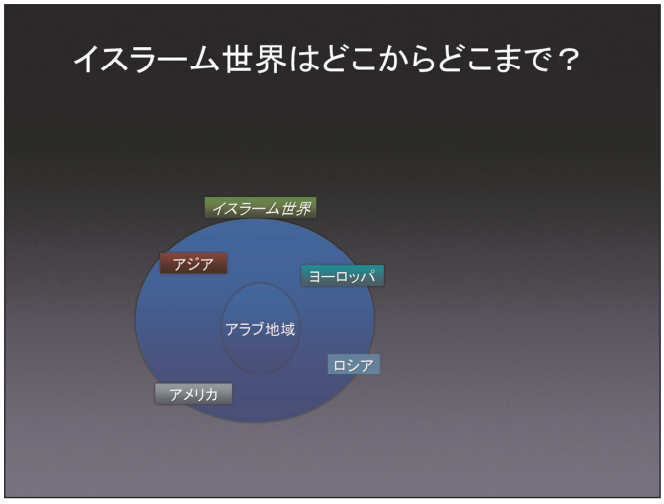
まずは中東、イスラム、それからアラブの関係を理解しないといけないと思います。この一つだけを覚えてください。まずは中東。中東の歴史を理解するためにはアラブを理解しなければいけない。では、社会は？　社会を理解するためにはイスラムを理解しなければいけない。つまり中東という、今まで変動可能な政治的概念のもとに非常にくるくる変わっている地域なのですが、その歴史を理解するためにはアラブの歴史、それから社会を理解するためにはイスラムの英知。



図－16

〈図－16〉　そして、イスラム世界はどの程度の状況にあるかというと、今、世界の 23％を占めています。地図の黄色いところです。20 年もたたないうちに 32％になるでしょう。23％と言うと、世界の４分の１です。４人に１人はイスラム教徒です。これはどういうことかと言いますと、避けられない文化なのです。押し寄せる。付き合わずにはいられない状況です。これはマイナスに聞こえるかもしれないけれども、ある意味では世界の文化になってきているわけです。おもしろいことに、イスラム人口のほとんどはアジアにあります。65％ぐらいです。そして残りはアラブがたぶん 15％ぐらいで、ヨーロッパと、あとはロシアとかインドです。ロシアは 1300 万人ぐらいいます。

そのような文化なのですが、ではアラブとどこでその辺が関わるのか。イスラム教の根幹、基本というものはコーランです。コーランが聖コーラン、聖典、聖書として成り立つためにはアラビア語でないとコーランにはならない。つまり翻訳されたものというのは、あくまでも翻訳本です。アラビア語は非常に権威を持っているのです。アラビア語を持つということはイスラムの中心になっていく。これがアラブの位置付けです。当然、アラブ人は少数派なのですが、発信する地域として最もイスラム教に近い、これは現実とちょっと違うのでしょうが、でもそうした位置付けになるわけです。ですから、例えばサウジアラビアはイスラム世界の盟主です。もちろんサウジアラビアの場合はメッカ、メディナなどがあるためでもありますが、当然、アラビア語です。



図－17

〈図－17〉　「イスラム世界はどこからどこまで？」ということですが、イスラム世界が来て、アラブ地域はアジア、ヨーロッパ。アメリカは第２の宗教ですかね。そしてロシア。アラブ地域が中心的な存在であり続けるためには、もちろん影響力を持たなければいけないわけですが、その宗教的な意味の影響力で今、アラブがイスラム世界の中心になっている。しかし、決して経済とか人口の面では、そうではないです。現在、イスラム最大の国家というのはインドネシアで、サウジアラビアではないです。言ってみればアジアとなると、日本はつながりが非常に深いわけです。深いというよりも非常に近い文化になってきます。

図－18

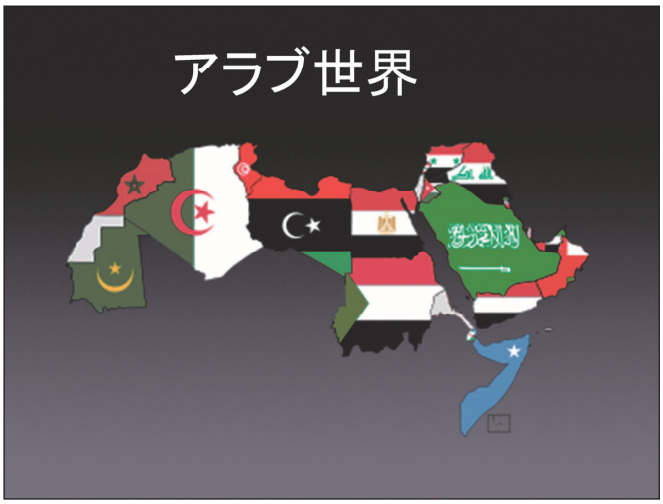
〈図－18〉　アラブ、中東、イスラム世界はこうした構造関係になります。イスラムは、アラブ、中東、イスラム世界をつなげてくれるのです。

　イスラムをつなげてくれるもう一つは言語、アラビア語です。先ほども言ったのですが、イスラムを理解していくためにはコーランを理解しなければいけない。そして、イスラムをマスターするにはアラビア語は非常に重要になるわけですから、アラビア語の役割が大きい。こうやって

イスラムと、アラビア語のつながりが、この三つを強くしていくわけです。そして重なっていくわけです。おそらく日本人からすると、この三つのイメージは限りなく近い。重ねているわけです。

でも先ほどの方がおっしゃったように、イスラム世界というのは必ずしもアラブではないのです。僕は思うのですが、今後、日本はそのように考えていかなければいけない。今、考えている動きは大きいと思いますが、でもそれより、世界のイスラムと付き合っていくためにはどうしたらいいのか、というところまで考えていかなければいけない。例えばハラルなどが非常に日本ではやり出していますが、そこの中心になっているのは、実はマレーシアです。サウジアラビアではない。そうした個別的な付き合いも当然、出てくるわけです。

■ アラブ世界とは？



図－19

〈図－19〉　ちなみに、併せてアラブ世界という言葉を私は連発しているのですが、これがアラブ世界です。おもしろい地図です。私の授業を取っていただくと国旗だけで分かるようになってきます。地理的にはアラブというのは何ですかね。どこからどこまでアラブでしょうか。どうですか、皆さん。クイズです。アラブ、アラブとみんな言うし、新聞も言っているし。イスラム世界は分かりやすいです。イスラム教徒が大多数でイスラム国家であれば、イスラム世界になるのでしょうが、これは今、圧倒的な世界の 16 億人です。アラブというのは何ですか。アラブの概念、アラブの定義とは何ですか。先ほど、ヒントをあげたのですが、どうですか。

参加者：アラビア語を話す人ではないですか。

アルモーメン：いいですね。アラビア語を話す人。もう、正解です。アラビア語を話す人。ということは、トルコは？

参加者：トルコはトルコ語。

アルモーメン：そうですね。アラブ世界になりますか。

参加者：違うのではないですか。

アルモーメン：そうですね。イランはどうですか。

参加者：ペルシャ語。

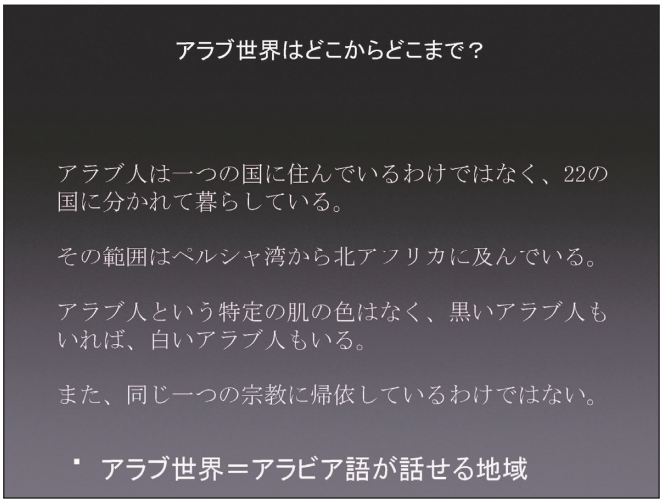
アルモーメン：ペルシャ語ということは、イランはアラブではない。では、どこ？

参加者：中東。

アルモーメン：中東、いいですね。ほかは？

参加者：イスラム。

アルモーメン：イスラム。そうなのです。今度は基準を持っていただいて、これで当てはめることができる。



図－20

〈図－20〉　アラビア語を持つということによって、いわゆるアラブという帰属を持つわけです。そうするとアラブ世界というのは、当然広い範囲にわたっていますが、これは一つの国に住んでいるわけではないのです。アラブというのは、今はたぶん人種的なものではないです。一つの世界観と言っていいと思います。歴史観、世界観。ただ、ある条件が一つないと成り立たない。それは言語なのです。言語を外せばアラブ世界の一員にはなれない。当然、アラブ人にはなれない。

ですから、よく言われるのは、トルコはアラブの歴史の中では当然、非常に深く関わった国ではありますが、でもアラブ世界の一員ではない。イスラムの世界のリーダーでもありますが。

アラブの範囲はペルシャ湾からイランです。ちなみにアラブ人はアラブ湾からと言っています。ペルシャ湾ではなくアラブ湾と呼んでほしいのです。そして、一つの同じ宗教に帰依しているわけではない。今は圧倒的にイスラム教徒なのでしょう。でもレバノンのような国はキリスト教徒半分、それからイスラム教徒も半分。キリスト教徒の中でもマロン派やカトリックなど、いろいろあります。かつてのユダヤ人は当然、ここに暮らしていたのです。エジプトは、60 年代であればもうユダヤの人たちが経済の中心だったわけです。今とはだいぶ状況は違っていましたが、一つだけ外せないのがアラビア語です。

そうするとアラブ世界というのは、この 22 の国だけなのかとなると、実はそうではないのです。ヨーロッパには 500 万人のイスラム教徒がいます。そのほとんどはアラブ系です。アメリカも、圧倒的にその数が多い。ドイツも 500 万人います。オランダでは生まれる子どもの 4 人に 1

人がイスラム教徒です。その人たちはどこかでアラビア語を覚えるのです。イスラム教徒であれば、やはりアラビア語です。コーランを読むとか、何かを理解するとなると、アラビア語の絶大な影響というものは、意外と私たちの知らないところで今でも相当に大きな存在なのです。大きな存在なのですが、日本ではアラビア語を専門に勉強するためには二つの大学しかない。偶然でしょうか。

これは問題です。お隣の韓国、中国、ロシアを見ていただければ分かると思います。企業でも、外交官でも、アラビア語をペラペラ話します。もちろん、日本にもそうした人はいますが、少ないです。私は今までいろいろな人に関わってきたのですが、若い頃は結構勉強していますが、入社したらどこかでアラビア語が消えたり、使えなくなったり、使わなくなったり。そうした武器というもの、文化的な外交というものがあります。日本はその辺は非常に弱いです。おそらく今年の一番痛ましい事件、後藤さんと湯川さん人質事件の時に、情報すらなかなかうまく入らなかったことが、それを一つ物語っていると思います。

■ アラブ世界の歴史的役割

ほかはどうでしょう。

参加者：ギリシャ文明から今のヨーロッパになるまで、アラブ世界は非常に重要な役割を果たしたとわれわれは習います。それがその後ヨーロッパの文明などになっているのですが、アラブ世界にもその時のものはたくさん残っているのでしょうか。

アルモーメン：残っているというのは？

参加者：例えば数学などです。みんなアラブを経由して後で発展したわけですね。後で発展したのはヨーロッパです。ただ、アラブ世界にも人がずっといるわけだから、そういうものが蓄積されて現代までつながっているのでしょうか。

なるほど。もちろん歴史的な役割というのは、一つの世界の歴史が共有していると思います。蓄積されているかどうかは分かりませんが、当然、今の状況では後退しているわけです。今、どこのアラブ諸国も、間違った政策かもしれないけれども、ただ、学問、あるいは人材育成の位置付けが非常に高いのです。違った方法でやっているのかもしれないけれども。ある意味ではアラブ人の意識構造の中には、昔持っていた栄光を取り戻したいとか、世界の学問をリードしていた頃の座をもう一度手に入れたいとか、そうしたものは今でもやっぱりあります。

一つの表れとして世界的には、アラブ人は、国家ではないけれども、専門家として活動している人はわりと多いのです。もちろん、それはそれぞれの国の国籍として活動はしていますが、例えばアメリカの大学の中のアラブ系の先生というのは圧倒的に多いです。それからヨーロッパも、もうどれだけいるかと思ってしまうぐらいです。そうした人たち、例えば今、中東和平問題の中心のガザにはかなりの数の Ph.D.を持っている人たちがいます。もちろん、仕事には使わないけれども、ソフトパワーとしては間違いなく大きな力を持っているのです。

こうやって私も 20 年、エジプトを離れてここへ立たせていただいていることが、一つ、そういうことかなと思っています。

ほかはどうでしょう。

参加者：実は去年と一昨年、ウズベキスタンへ行ったのですが、ウズベキスタンではウズベキ語での「こんにちは」を「アッサラーム・アライクム」と言うのです。

アルモーメン：そうですね。アラビア語が入っていますよね。

参加者：それからウズベキスタンは、地球上で一番空気が澄んでいるので、世界の天文台がそこに集まってきて、有名な施設で地球の速度とかいろいろなものを観測した。だからそこで聞いた言葉は、昔のイスラム科学とか、アラブの科学だったという、二つ重なって出てくる。

アルモーメン：ああ、そうですね。

参加者：だから何か、そこではアラブの影響もあったし、イスラムの影響もあった。だからどちらをどう扱うのが正しいのか、私は分からないけれども、中央アジアには何か、そうしたものが本当に混じっているのかなという印象がある。

イスラムのいわゆる健全だった頃は、非常にグローバルな視点で国民を考えていたわけです。ですから、当然、支配層にはアラブ人が入っていたけれども、そうでない人も当然、いたわけです。ですからイスラムの繁栄していた時代には、必ずアラブ人が中心だったとは言えない。有名なサラディンはクルド系の人です。そうした人たちや学者はいくらでもいた。ただ、一番のアイデンティティだったのはイスラム帝国の中の、一人の市民であること。それは、ある意味では国籍といったものと同じであり、そうした構造になっていたわけです。だから、ウズベキスタンでもアラブとイスラムが重なるわけです。重なる時代もあるが、別にアラブがずっとリードしていたわけではない。最後はオスマントルコ、トルコの人たちで、これはアラブ系ではないのです。

ですから、冒頭で紹介したと思いますが、本来のイスラムが目指すものというのは、決してアラブ独占の社会でもなく、いわゆる健全な社会を作って、そこにいろいろな人、いろいろな国籍、いろいろな人種が共同体を作って、繁栄した社会を実現していく。ただ、私たちは今は全くそういうことをしていません。宗派とか何派とか、それからある意味のアイデンティティ、その中でさまざまに細分化されたわけです。レバノン系、シリア系、今度はエジプトになると南系、北系とか。イエメンの問題は南と北とか。もちろん、これはイスラムとアラブの問題だけではないと思います。

ご存じのとおり、外からのいろいろな影響もあって、富の多い地域に対して、ヨーロッパ、西欧が操作したことは間違いない。そして今も操作しているのです。操作していることは、そこにすべて責任を転嫁するつもりはないのだけれども、当然それもあって、今の混とんとした状況になっているわけです。

例えば今、難民が問題になっています。皆さんはたぶん、ニュースで見ていらっしゃると思います。そしてそれに対するヨーロッパの対応が素晴らしいと言われているわけです。もちろん素晴らしいことをしているのでしょうが、5 年間、放っておかれたわけです。実はそれまでの 5 年間、難民の問題は続いているわけです。きのう始まったわけではないです。これがもし、きのう始まって、きょうになってヨーロッパが動くのだったら分かります。今になってなぜ動くのか。私たち受けとる側としてはそこまで考えがまわらないでしょうけれども、でも決してそんないいことばかりではない。皮肉なことには、今、8 万人がヨーロッパに押し寄せているわけです。

逆に、今のシリアは、1 人だけ出れば 8 万人が自分の国に戻れる。アサド大統領が出れば難民が戻るわけです。しかし、彼を出さない。あれはかつてのサダム・フセインのようです。覚えていらっしゃいますか。正当防衛と言ってイラクは攻撃されたわけです。でも、シリアは別格。では、リビアのカダフィ元大佐は？　数カ月で NATO が動いた。僕からすると、こういうのは全部、偽善です。全部ダブル・スタンダードです。うそです。

皆さんの前だから言っているわけではないです。声高らかに言っているわけです。そんな単純なものではないのです。イスラム教とか、イスラム教徒とか、シーア派とスンニ派とか、そういうものではないです。世界は黙っていた。今でも黙っている。何のためか。当然、お互いの利害関係があるのでしょう。だったら、イスラム教徒とアラブの人たちも目を覚まして、もっとある意味で自分の利益がどこにあるのか、動くべきだと私は思います。でも 1 枚の写真だけで世界は動いたなどという、そんなのは正直、私はだまされません。

■ 日本に求められる役割

日本は、国際社会において自分の位置付けをどう考えるのか。アラブとどう付き合うのか。教育の面ではどう役割を果たすのか。中東から日本に来ている留学生に私は 6 年間、統括官として関わって、ほとんどの日本の大学を回って来た人間なのです。留学生が大学に入るのはとてもたいへんなことなのです。グローバル化と言っていますが、正直、ちっとも進んでいません。私も当然、その中に入っているわけです。一員ですから。当事者でもあります。もちろん、全部悪いことだけではないのだけれども、ただ私は、日本はたいへんユニークな国だと思います。自分の存在、自分の哲学、自分の行動をより鮮明にして、率先して何かやれることはいっぱいあると思います。

企業は非常に頑張っていると私は思います。もちろん一部の関係者はアラブとも一生懸命付き合おうとしているのですが、やはりまだまだ少ないです。サウジアラビア大使館の統括官をやっていたのですが、7 年間かけてやっと 600 人の留学生が日本の大学に入ることができたのです。サウジアラビアはお金と人的資源のすべてをつぎ込んで、日本で部署を作って、そして 600 人がやっと入れることになったのです。でも、たった 600 人です。アメリカの場合は 8 万人、イギリスは 2 万人。数の問題ではないかもしれないけれども、やはりそうした難民問題や留学生、教育などについては、日本がこれから求められる役割は大きいと私は思います。

■ 「アラブの春」について

では、最後の質問はどうですか。

参加者：アラブのことはあまり分からないのですが、「アラブの春」というのは、あれは誰が仕掛けてどうだましたのか。あれが徹底的にアラブを駄目にしたのではないかという感じがするのですが、どうですか。

ご指摘のとおり、駄目にしたかどうかはちょっと分かりませんけれども、ただ、結果的には今は駄目な状況になっていると思います。まずは名前からいきましょう。「アラブの春」、ご存じかもしれないですが、アラブの春というのはちょうど砂嵐が来る時期なのです。決して花が咲くような季節ではないです。

今度も、その名前を付けたのはヨーロッパです。私たちは命名されやすい地域かなと。いろいろな勝手な名前を付けるのが好きなのでしょうが、「ジャスミン革命」とか、それから「アラブの春」。アラブ人からすると、あれは革命と言っているのです。革命という、アラビア語の響きはすごくいいです。つまり変革ということです。変革を目指して確かに市民が立ち上がったと思います。これは私も目の当たりにしました。これはわざと動員させたのか。今は、正直、いろいろな陰謀論があります。これはなかなかきりがないのでしょうが、ただ、間違いなく仕掛けられたと思います。

ある意味では、国民を動員させる状況を整えない限り、できるわけがないのです。ただ、途中でなぜうまくいかなかったのかという話です。あるいは最初の構想はそこまでで、おっしゃったとおり頓挫させるのかどうさせるのか。これはたぶん、最後まで読み切れる人はいなかったと思います。

ただ、明らかにこれは市民の、あるいは国民の手で操作したわけではないので、当然、ある意味で弄ばれたわけでしょう。ただ、一番弄ぶメンバーはイスラム勢力です。これが駄目というよりも、うまく最後まで国民が中心になって、先ほど申し上げた変革までは実現していないと思います。しかし一つ変わったのは意識です。つまり変わるということは可能なのでしょうが、変われることが全部いいかどうかというのは別です。これは市民レベルでは、わりといい勉強になったと思います。ただ革命は今でも続いているのです。「アラブの春」は置いておいてください。

しかし、別に 2011 年に春が始まったわけではない。エジプトあたりでは、2005 年あたりからずっと小規模のそうした反対デモなどがあったわけです。つまりアラブ人というのは自分たちの問題をある程度意識しているけれども、無力なのです。どうしたらいいのか。当然、そこのガッツが足りないのでしょう。

それから、いわゆる独裁政権というのは基本的に外から、西欧から、列強から今まで支えられたわけです。これはたぶんご存じと思います。知らない人はいないと思います。エジプトのムバラク大統領がずっと 30 年やっていたのは、それはアメリカに祝福されていたわけですから。それから、カダフィ元大佐は 40 年、そんなのは偶然ではないのです。さっと手を引いた時にそうした状況になったわけです。

あともう一つ。イスラム勢力は統治能力はあるのか。ないのか。これは実証されたかもしれません。結果的には、やはり経験が足りない。それから構想的な統治というところまではまだでき上がっていない。そうなると、トルコのようにイスラムと政治を分離していいのか。トルコのようにと言われるけれども、トルコはそんなに分かれていないのです。ある部分だけは分かれているけれども、基本的にはイスラムの理念と考え方でやっているわけです。そうすると、もう、イスラムは置いておいて民主主義的な西欧型のものをやるのか。分断が起きたのですが、それがなかなか修復できないのです。

何と一つの家族の中で意見の違いが出てきて対立したり、つまり「アラブの春」はアラブをズタズタにしたわけです。たぶん、それが最終のねらいだったのでしょうが、市民の思いと外のねらいには当然、ギャップがあったわけです。

■ おわりに

私は好き勝手に話させていただいたので、最後に一つのメッセージを。中東、アラブ、イスラムのちょっとした理解につなげていただけたらと思っています。このテーマ自体はこれからも当然、いろいろな場面で出てくると思いますが、決して他人事ではない。それからアラブ、イスラム、中東というのは、マニア的なものではない。メジャーです。メジャーなので、おそらく日本は自分の立ち位置を考えて、今後もそれを探求しなければいけないのではないかと思っています。

ありがとうございました。

■ このレポートは平成 27 年 9 月 10 日コートヤード・マリオット銀座東武ホテルにおいて行われた、第 135 回本田財団懇談会の講演の要旨をまとめたものです。本田財団のホームページにも掲載されております。
講演録を私的以外に使用される場合は、事前に当財団の許可を得て下さい。

当日配布資料

「アラブ人取扱説明書」

（Dubai Business Today 連載分）

お祭り三昧の月、ラマダーン（断食月）

アルモーメン　アブドーラ／大東文化大学国際関係学部講師

日本と違うイメージ

「お腹すいたなあ。どうしようか」。時刻はすでに午後の４時を回っている。「昨日、夜中に起きられなかったから、スホール（断食開始時間の前の食事のこと）を食べられなかったからな」、「でも、がまん、がまん、もうちょっとでおいしいご飯を食べられる」。断食の１日が終わりの時間に差し掛かったころ、お腹が「お腹すいたぞ、お腹すいたぞ、プンプン」と不平不満を訴えているような空耳まで聞こえてくる。

それもそうだ、お腹の不満ももっともである。実際、最後に食べたのは11時間も前なのだ。12時間以上（日の出の時間から日没までの断食時間）お腹をすかせて、初めて口にする飲み物、食べ物の味や香りは格別である。ドバイも含めてイスラム世界の全地域は、今月の１３日ごろから、一大行事の「ラマダーン」（断食月・イスラム暦９月目）を迎えることになる。これを受けて、まもなくイスラム世界、とりわけアラブ世界のどこもラマダーン一色となる。

しかし、普通「断食」と聞いて何を連想するだろう。

たいがいの場合、何だか苦しそうな日々の連続を連想しがちであるが、まあ、そう思うのも無理はない。

しかし、実際はどうだろう。「ラマダーン」の時期に特別な思いを馳せるイスラム教徒にとっては、ラマダーンと言えば、楽しさいっぱい、仲間が集まり、美味しいものもたくさん食べられることなどなど、良いことずくめの時期の到来なのである。

© アルモーメン　アブドーラ

家族との絆

断食が明ける時間の30分前は、家も外の町も慌しい。けれど子供の頃は、私にとっていつもその時間は心躍る特別なひと時だった。食事の支度に、創作ジュース、焼きたてのパンの買い出しなど家族みんなが忙しい。まもなく断食の時間が明け、家族の団らんが始まる。イスラム教徒、またアラブ人にとっては、毎日、家族団らんを楽しめるこの時を心待ちに、1日を過ごすのが断食への原動力なのかもしれない。

ラマダーンの時期になると、町のにおいが変わる。年に一度の大切な時期であるだけに、家族の皆が張り切って準備している。

「今日は、母親はどんな美味しい料理を作るのだろう」と期待に胸を膨らませ、それにしてもお腹がすいたなあと思う。ラマダーンでは、毎日のメニューが違うのは当たり前。父親も知恵を絞って、家族を喜ばせる一品を捜し求める。「今日はスイカにしよう。すいません、これを２つ下さい」父親は重さをものともせずに、張り切ってスイカ２つを持ち運ぶ。

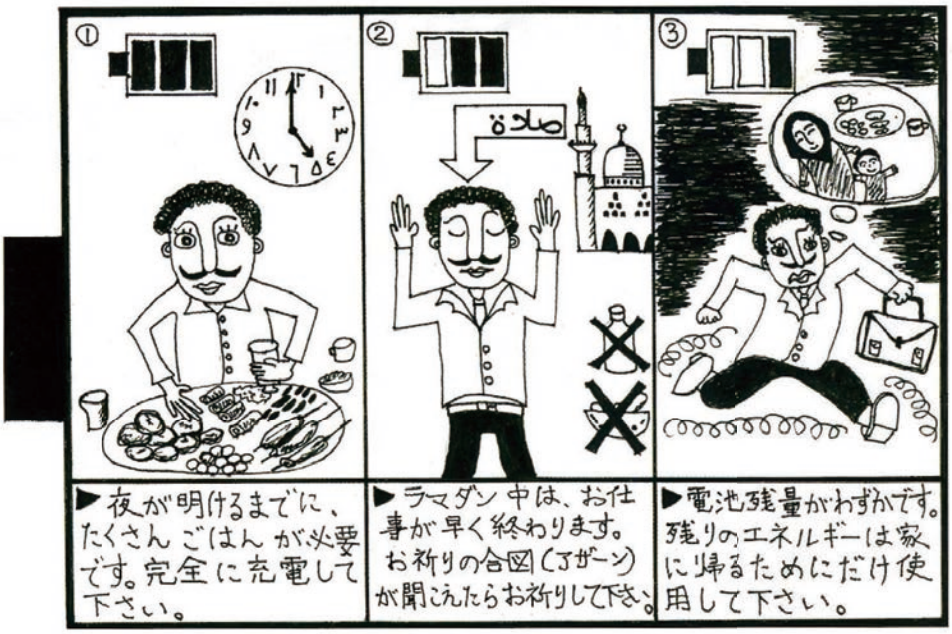
若者もラマダーンを思う存分楽しんでいるようだ。ラマダーンがやってくると、あちこちでラマダーンに合わせた様々なイベントが一斉に始まる。

洋服、家電製品、ラマダーンのセール、ラマダーンのサッカー大会、ラマダーンのディナー、ラマダーンの遊園地、テレビスペシャル、特集、映画、ドラマなどなど。とにかく、食べる、食べる、食べまくる。そして食べた後は、遊ぶ、遊ぶ、遊びまくる。町全体はイルミネーションや彩り鮮やかのライトで飾られるのも、ラマダーンのときだけの楽しみの１つ。

食べることや遊ぶのも良いけど、礼拝することも大切。ラマダーンは、イスラム教徒の連帯感の大きさを実感させられる時期でもある。

ラマダーンの楽しみのもう１つは、礼拝だ。普段の５回の礼拝とは別に、善徳の高い礼拝が合同で毎日の夜の時間に行われる。

アラブ人（イスラム教徒）はこうして、ラマダーンを全身全霊で楽しむのだ。断食の１日をやり遂げた自分へのご褒美として、夕方から、翌日の明け方まで、思う存分に食べて、遊んで、そしてアッラーが与えてくれた恵みと祝福に感謝することを忘れることなく礼拝にも勤しむ。これがイスラム教徒「ラマダーン」なのである



断食時の付き合い方

「一体、朝から夕方まで、食べず、飲まずに過ごすことのどこが楽しいだろうか？」とあなたは疑問に思うかもしれないが、あるアラブの知識人の話によれば、「世界の様々な宗教には、断食するという行為が見られるが、イスラム教の場合は、物理的に飲食を絶つことだけでなく、悪態や、社会や他人に害を与える行為を絶つことこそ、イスラム教が考える断食の本当の意味なのである」。

イスラム教徒皆が皆、このような精神を忠実に実行しているかどうかは別として、イスラムの普遍的な哲学がそこだと言える。

ラマダーンのときに、もしアラブ人と接する機会があれば、いくつか心掛けたいことを挙げてみる。

①ラマダーンが始まったことについて、次のようにお祝いの言葉をかける。「クッル　アーム・ワ　アントム・ビハイル」（毎年、あなた方は平安でありますように）。

②極力、断食中の人間の前で、食べたり、飲んだりしないように（ちなみにタバコを吸うのもだめ）。

③女性の場合は、肌をさらすような格好を避けること。

④ビジネス、取引などに関する交渉や重要な話を空腹の時間を避け、夜に済ませるようにすること。

⑤断食明けの時間や礼拝の時間を考えて、食事に誘うこと。

断食明けの食事をイフタールと言う。

⑥「ラマダーン・プレゼント」として相手に食べ物や飲み物をプレゼントするのもお勧め。ちなみにラマダーン用の特別なお菓子もある。

「なんだか、めんどうだな」とあなたは思うかもしれない。しかし、彼らがそう考えるなら、それが彼らの現実なのである。

日本人はアラブ世界のことをよく知らない。

一方、アラブ世界の人々は日本の電化製品には興味はあっても、日本社会のことはほとんど知らないのである。そのため、互いに対する偏見や誤解にとらわれやすい。

もしかしたら、私たちが分かっていない、または知らない理由、彼らなりの考え方があるのではないだろうか。相手に対し「あなたのことを分かっている」と言葉や行動で伝えることで、文化や宗教が違っても、相手に安心感を与えることができると思う。互いの間の距離がきっとぐんと縮まるに違いない。

自分が見る視点より、相手が考える視点を掴めることこそ、政治やビジネス、何においても互いがうまくいくための必須条件だと思う。

イスラム世界やアラブ社会に対する偏見と独断の深い闇に、光をどう当てるかが今、問われている。

つづく、・・・・

アルモーメン アブドーラ氏

1975年、エジプトカイロ生まれ。2001年学習院大学文学部日本語日本文学科卒業。03年同大学の人文科学研究科博士前期終了。現在、同研究科で日本語とアラビア語の対照について研究。専門は言語学・日本語とアラビア語の対照研究。

大東文化大学国際関係学部講師。NHKテレビアラビア語会話講師。NHK・BS放送アルジャジーラニュース通訳。

現在、外務省などの公的機関の通訳、映画や演劇などの翻訳、講演会や執筆などでも精力的に活躍。天皇皇后両陛下、アッバス大統領（パレスチナ）、スルタン皇太子（サウジアラビア）など多くの首脳や要人の通訳を務めた経験を持つ。主な著書に「読める書けるアラビア文字練習プリント」（小学館）、「アラビア語が面白いほど身に付く本」（中継出版）

「運命」はアッラーの手に

アラブ人の考える「運命への認識」

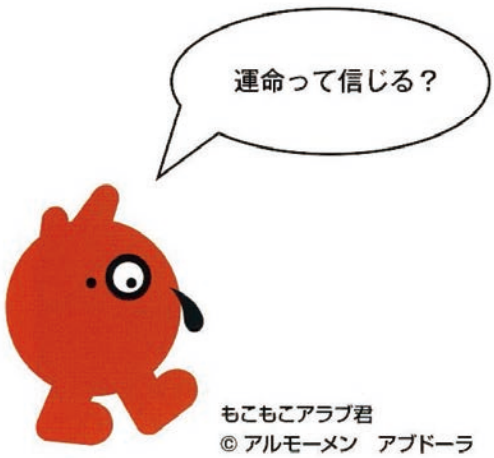
「運命って信じる？」。これは決して、女性を口説くための殺し文句のつもりで言っているわけではない。もしこんなことを聞かれたら、皆さんは果たしてどう答えるのだろうか。恐らく、動揺しているような表情を見せながら、「運命ですか。そうね、あまり考えたことないなあ」と答えそうな気がする。

「しかし、同じ質問をアラブ人の友人に聞いてみる・・・「そんな当たり前のようなことを聞いてどうするの」という顔をしながら、「勿論さ、そんなのは当たり前だろう」と言うのだ。

「運命」を表現する言葉は、恐らくどの言語にもあると思うのだが、その中身は国やその文化によって、違ってくるのは紛れもないことである。もちろん、アラブ人が考える「運命」には宗教による独特な発想があるのも確かだ。だとすれば、その「運命論」とは何かを、ある程度つかめば、少なからずアラブ人の言動が理解できる…かもしれない。

「この世のすべての出来事は最終的にはアッラーの御意志によって決まる」・・・それがアラブ人の考える運命論である。そして、アッラーのその決定に従うのが、真のイスラム教徒なのである。

人間はいつ、どこで不幸にあうかわかったものではない。けれど、この運命論に救われることもしばしばある。試験に落ちた、仕事で失敗した、お金がなくなった、彼女に振られた、など、人間が生きている間に、限りなく、がっかりさせられるような出来事に出くわし、人生とは、山もあれば谷もあるというのがそういうことだろう。そして、ものごとが思いどおりに行かないとき、「そうなるのは運命だったにちがいない」、「アッラー（神様）の御意志だ」と思ってしまえば、何だかほっとする。「都合よく開き直っているだけじゃないか」と捉えてしまう人もいるだろうが、アラブ人と日本人が互いにうまく行くか行かないかは、そこのところに対する理解があるかないかという点にもかかっている。事実、日本人とアラブ人の間に誤解が絶えないのは、その「運命への認識」が違うところもあるか



もこもこアラブ君
© アルモーメン　アブドーラ

「備えあれば憂いなし」

このコラムを書いているときに、あることを思い出した。日本語を習い始めたころ、日本語には「臨機応変」という言葉があるのを聞いて、驚いた覚えがある。事実、日本人ほど、期待した計画を練る者はいない。一方、アラブ人は、計画を一応作りはするが、それが実行できるとは限らないという気持ちで、結果に対する期待は半々である。

何が起こるか分からないと、「備えあれば憂いなし」と、つねにあれこれを考え、万一の事態が起きても心配しないですむようにするのが日本人の得意技だが、アラブ人は、「その万一のときを避けられないものだ」との思いが強くて、「成るようになる」と、正しく臨機応変に考える性格が強い。計画は実行するためにあると考えるのは日本人だが、アラブ人は、計画というものが完全に実行できないものだとして、毎日の生活で「臨機」のときも、また「常機」のときも、運命に身を委ねながら、「応変に」生きている。

しかし、人間中心主義や経験主義の因果律などの思想によって、人間は環境と運命を支配できると考える日本人には、アラブ人のこの運命論はなかなか理解できるものではない。

まあ、それも分からないわけではないのだが、「人間がすべてを支配しコントロールできる」という論理もなんだか不自然な感じがする。

「必ず、そして、希望通り、何でもできるという自信過剰になることは、傲慢的で、神の存在への冒涜だと」と父親からよく聞かされていた。

だから、何かしようと思うときに「何事もうまく行きますように」と、まずアッラーにお願いするのである。

ラマダーンの願いごと

「神様への願いごと」と言えば、正しくイスラム暦の９月、ラマダーンがもっとも「願いごとができる」季節である。

実はラマダーンの最後の 10 日のうち、ある特定の日にアッラーに願いを込めてお祈りすれば、「すべての願いごとがかなえられること」や、「これまでのすべての罪を許してくれること」など、という、聖なる一夜がある。そして、その一夜の名は、「ライラト　ルッカドル」というのである。ただ、そこに大きなハードルが１つあって、具体的には、「ライラト　ルッカドル」とは、ラマダーンの何日に当たるかなどは明確にされていない。人々は、神から与えられるこの「恩赦」のチャンスを心待ちにして、アッラーへの礼拝に励みながら、ラマダーンのこの「ラスト・10 デイズ」を過ごすのである。

「今年、大学入試に合格できますように」「母親の病気が早く治りますように」「就職や留学ができますように」などなど、人々の願いごとがラマダーンの神聖な時間を駆け巡り、明日への希望をつなげていく。そして、これもまた、イスラム教徒が抱くラマダーンへの特別な思いの源だと言えるのだろう。

こうした発想に馴染みがないだけに、アラブ人の言動に対する日本人の不平不満が募る一方となる。

そして、そんな「現在進行形」型の性格が強いアラブ人に接するとき、次のようなことを心がけるようにお勧めしたい。

アラブ人取扱説明書

―― 約束編 ――

1. 約束する際に、「必ず～」という言い方を極力避ける。
2. 約束するとき、最初か最後にインシャッラー（アッラーの御意志のままに）と一言付け加える。相手もきっとあなたに親近感が湧いてくるでしょう。

例：

Ⅰ. 日本人：それじゃ、明日、３時ですね。
アラブ人：インシャッラー、３時ですね。

Ⅱ. アラブ人：明日、インシャッラー、来ますか。
アラブ人：はい、インシャッラー、３時に来ます。

3. 約束を守れなかったとしても、厳しく追及せずにすまなかったという相手の言葉を快く受け入れる。
4. 10 分ぐらいさばを読んで、約束の時間を決めると、時間どおりに会える。

アルモーメン アブドーラ氏

1975 年、エジプトカイロ生まれ。2001 年学習院大学文学部日本語日本文学科卒業。03 年同大学の人文科学研究科博士前期終了。現在、同研究科で日本語とアラビア語の対照について研究。専門は言語学・日本語とアラビア語の対照研究。

大東文化大学国際関係学部講師。NHK テレビアラビア語会話講師。NHK・BS 放送アルジャジーラニュース通訳。

現在、外務省などの公的機関の通訳、映画や演劇などの翻訳、講演会や執筆などでも精力的に活躍。天皇皇后両陛下、アッバス大統領（パレスチナ）、スルタン皇太子（サウジアラビア）など多くの首脳や要人の通訳を務めた経験を持つ。主な著書に「読める書けるアラビア文字練習プリント」（小学館）、「アラビア語が面白いほど身に付く本」（中継出版）

大東文化大学国際関係学部講師　アルモーメン アブドーラ

「情」と「規則」がアラブ人と日本人の違い

エジプトにいる親友アリーさんの話

1カ月間、毎日のように、お祭り気分で過ごしていたラマダーン(断食月)も、今夜で最終日だ。今夜もまた夜更かし。去っていくラマダーンに、ちょっぴり寂しい気分。

けれど、休む暇もなく、明日からは3日も続くイスラム世界の2大祭りの1つ、「イードッルフィトル」(断食明け祭り)が始まる。

時間はもうすでに夜の11時を回っているのに、街はイード(祭り)の買い物客や、夜更かしが許されるラマダーンを最後の最後まで楽しもうとしている若者であふれかえっている。何だか日本の何かに似ていません？そうそう、今日はまさしく、日本で言う「大晦日」のようなものだ。

「あっ、靴を買うのを忘れた。早く、買いに行かないと！」と買い物で両手がいっぱいでも、うきうきとしながら、お気に入りの靴を探しに行く。

アラブ世界では「イードッルフィトル」といえば、新しい服に新しい靴、イードのクッキー、お年玉などと心躍るようなことばかりだ。

もこもこアラブ君
© アルモーメン　アブドーラ

しかし、それにしても、アラブの人ってなぜ何でもぎりぎりで済ませようとするのだろうか・・・とあなたは思うかもしれないが、ここでは細かいことは気にせず、「成り行きに任せてぎりぎりでも何とかなるさ」と思えるのが、アラブ人なのである(流儀だと言えるかもしれない)。

私の親友のアリーはほしい靴は見つかったのだが、色が合わなくて、困っていた様子。

「取り寄せなら、イードの休み明けに注文できますが・・」とお店の人が言う。「今夜、取り寄せてもらうのを何とかお願いできませんか」「無理ですよ、そんなのは」とお店の人に断られたアリーはがっかりした様子を見せる。

そして、必死でお願いする。そうすると、お店の人は「困ったな。ちょっと待ってくれ。本当はこういうことはしないけど。まあ、明日はめでたいイードが始まるし、しょうがないね。となりのお店に聞いてみるよ」と店員さんはアリーの頼みを何とか聞いてあげようとする。

アリーの(イード前日の夜)はこのようにして無事お気に入りの靴を手に入れられたことで終わったのだった。

規則よりも「気持ち」が優先

しかし、よくよく思い返してみると、アラブ社会では、店員さんのこうした行動というのは決して珍しいことではない。

もちろん、こうした行動はサービス精神から出たものではないのも事実である。

「特別にお願いする」・・・この発想こそ、アラブ人の行動パターンを解くカギなのである。

アラブ人はとにかくおおらかで、規則や細かいことなどを「気にしない」との定評があるように、ある意味では、柔軟性のある社会だと言える。

ところが、あれだけ「何事も気にしない」このアラブ世界でも、1つだけは気にせずにいられないことがある。それは「人からの願いや頼み事」である。

例えば、この間、テレビ番組の撮影でドバイへ行ったのだが、取材先の中の特殊な場所を取材するのにまた別途の許可が必要だと知る。しかも申請してから許可が下りるまで、普通なら3日もかかるという。しかしトップの責任者に撮影の日数が限られていることを伝えると、彼は電話をとりながら「分かりました。何とかします」と1本の電話だけで救われたこともあった。

アラブ人の気質について、「アラビアのロレンス」が残した言葉を思い出す。「アラブ人は法より、人を信じる」と。

自分を取り巻く状況がどんなに厳しく、不利でも、人の情に訴えれば、何とか問題が解決できると常に希望を捨てず、直談判で何とかしてみようと思えるのがアラブ人なのだ。

規則や規定など、本来なら一存の意思で変えられぬことであっても、個人的に特別な事情があれば、決定権を持つ人に訴えて、考慮してもらうように働きかける。

屁理屈に聞こえてしまうのかもしれないが、問題に遭ったときに、まず、アラブ人にとって大切なのは、規則ではなく、人間なのだ。

アラブ人と日本人が互いに相手を説得しようとするとき、訴えるところがまるで別のものだ。

アラブ人は相手を説得するときに理屈よりも、情に訴えようとする。一方、日本人は、「こういう規則だから」とか「みんながこうしている」というような理屈や論理に訴えようとする。

こうして、アラブ人と日本人は、相手の何に訴えて、説き伏せようとするかが違うため、互いにうまく行かないことがよくあると聞く。

まあ、小難しいような話になってしまいがちであるが、要は1人と1人の人間同士の話。

こんな考え方をするのだなあと少しだけでも心に留めておくだけで、お互い親近感を持つことができたり、誤解して嫌な思いをしてしまうことを回避できるのでは？と期待したい。

日本の人が1人1人考え方や性格が違うようにアラブ人も人それぞれ。みんな違ってみんないい、のである。

つづく・・・・

アラブ人取扱説明書 願いや頼み事篇

1）アラブ人に何かを頼まれた場合、成否を問わず、相手の力になりたいという気持ちを示す。

2）友達の頼み事を断らない。どうしても対応できない場合は、やれるだけのことをやってみると言って、努力している姿を見せる。そして、どうしても叶えてあげられない場合は、「力になれなくて、悪い！！」と熱く、丁寧に謝って、できない理由や状況を説明する。

3）アラブ人の友人に何かを特別にお願いするときは、
「私のために」と一言を添えると、抜群の効き目がある
逆に頼まれた時は、必ず「君のために」と一言添えると、相手は
その気持ちをすごく大切にしてこちらに何かあった時、同じように
必死になってくれる。

例：
アラブ人：チケットの出発日の変更を何とかお願いできないかね
日本人：できるかどうかは分からないが、君のためなら、何とか頼んでみよう。

4）ビジネスや商談などの場面では、相手の一方的都合で変更や例外事項が発生することを想定しておくことが重要。つまり何が起きても「君のためだ」と受け入れるとものすごく感謝される。そのため仕事仲間や知り合いからの申し入れを受け入れられるよう、融通のきく内容を予め用意する。

例えば：
日時の変更が可能なスケジュール
飛行機や宿泊など手配の内容などに関して特別枠を設ける。

※アラブ人の頼み事は必ず聞かなくてはならないということではなく、あなたの力になりたいという気持ちが相手に伝わることが大切。無理やりに願い事をかなえようとプレッシャーを感じる必要は全くありません。

アルモーメン アブドーラ氏

1975年、エジプトカイロ生まれ。2001年学習院大学文学部日本語日本文学科卒業。03年同大学の人文科学研究科博士前期終了。現在、同研究科で日本語とアラビア語の対照について研究。専門は言語学・日本語とアラビア語の対照研究。

大東文化大学国際関係学部講師。NHKテレビアラビア語会話講師。NHK・BS放送アルジャジーラニュース通訳。

現在、外務省などの公的機関の通訳、映画や演劇などの翻訳、講演会や執筆などでも精力的に活躍。天皇皇后両陛下、アッバス大統領（パレスチナ）、スルタン皇太子（サウジアラビア）など多くの首脳や要人の通訳を務めた経験を持つ。主な著書に「読める書けるアラビア文字練習プリント」（小学館）、「アラビア語が面白いほど身につく本」（中経出版）

アラブ人
取扱説明書

連載

アラブ流の謝罪

大東文化大学国際関係学部講師　アルモーメン アブドーラ

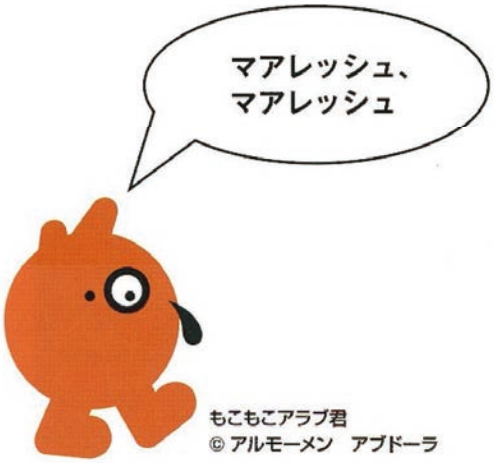
日本で学んだ「謝罪」

貧しかった学生のころ・・・・、東京のとある酒屋の店員のアルバイトをしていた。ぎりぎりその年の学費を稼いでは納め、そして、翌年も、またその繰り返しで、学費を貯める一心で悶々とした日々だった。今となっては、その苦い日々も懐かしく思い出される。

そもそも、イスラム教の教えでは、飲むことや売ることも、そして手が触れることすら、禁じられているアルコール類の販売を専門としている酒屋で働くなんて想像もしなかった。

正直、「酒屋で働く」と聞いたとき、言葉を失うほど衝撃だった。「酒屋ですか！　私が酒屋で働くっていうこと？無理、無理ですよ」――こうしてはじめはかたくなに拒んだのだが、厳しい経済的状況を強いられる中、妥協するしかなかった。

しかし、今だから言えるのだが、これは、イスラム教徒としての私にとって、本当につらい決断だった。異郷にあれば心細くなることが多い中で１人で考え、１人で決断するものだが、私は一層心細い気持ちで最初の日本生活を送っていた。しかし、そこで私は大切な体験を得ることになる。



もこもこアラブ君
© アルモーメン　アブドーラ

「先生、日本の生活で一番大変だったことは何ですか？」と学生たちがよく質問してくる。

「速さです。つまり、生活の回転の速さです」と言うと、「日本の生活ってそんなに速いですか」とさらに学生は納得のいくような答えを求めてくる。私はそのとき目の前においてあった、使い込んでいる様子の学生のスケジュール帳を指さしながら、こう言う。

「あなたは手帳を持っていますよね。大学生のあなただけではなく、主婦やサラリーマン、中学生、高校生、恐らく小学生も持っているでしょう。あの手帳こそが、日本の回転の速さを物語っているのではないでしょうか。予定でぎっしりと詰まった生活をこなすための小道具のようなものでしょう。アラブ世界では、スケジュール帳を持つのは、ビジネスマンのような人で、ごく限られた職業の人たちだけです。それは、ゆっくりと流れる時間のあるアラブ社会では必要ないからなのかもしれません」。

とにかく、最初のころは生活のその回転の速さについていくのに必死だった。食べ物、洋服のセンス、言葉の感覚、生活リズム、接し方、感じ方、何から何まで、自分が生まれ育ったアラブ世界と大きく異なるところから来るぎごちなさに耐えながら、必死で「日本」を学ぼうとした。

その第一の教訓を教えてくれたのは、意外にもアルバイト先のその酒屋さんだった。

比較的早いころだったと思うが、ある日、学校を終えてすぐにアルバイト先の酒屋に向かったときのことだ。不運にも、ちょうど乗り換えするはずだった電車が人身事故を起こし、電車が止まってしまった。

幸い、すぐ運転は再開したのだが、結局、10分ほど遅れることになってしまった。「とにかく、状況が状況だし、これについて店長もきっと考慮してくれるだろう」と、情に訴えるアラブ式で考えていた。

店に着くと、なぜか、「遅くなってしまって、すみませんでした」という言葉がすぐ口に出ず、思わず、「人身事故で電車が止まってしまって、乗り換えするのが・・・」と遅れた理由を必死で説明しようとしていた。すると、店長さんは厳しい顔をしながら、次のように話したのを今でも鮮明に覚えている。

「日本では、どんな事情があるにしても、遅刻することだけは絶対にダメなのですよ。それに、やむを得ない事情で遅くなったのは分かるけれど、こういうとき、まず真っ先にやるべきことは自分の非（至らなさ）を認めて謝ることです。それが日本人のやり方なのです」。

なるほど、謝ることが先決だというわけだ・・・とその論理が今ひとつしっくりこず、なかなか納得できなかった。

イスラム式謝罪の中身

考えてみれば日本語は、「すみません」「ごめんなさい」「申し訳ありませんでした」「失礼しました」などなど謝罪表現が多い。また、何かにつけ、すぐに相手に気を遣って謝る日本人の真摯な姿も印象的だ。もちろん、アラビア語にも「謝る」を意味する言葉がいくつかあるけれど、日本人のように謝罪表現を使うのは得意ではないのは確か。謝

罪を意味する言葉の中で、アラブ人がよく口にするのは「マアレッシュ」という言葉だ。この「マアレッシュ」という言葉は「謝り表現」として「ごめんね」のような意味で使われると同時に、相手がかけてきた迷惑などを許すときに「気にしないで」「何でもありません」「いいんですよ」の意味でも使われる。つまり、「謝ると許す」という異なる状況いずれのときにも、この言葉が使われるのである。世界の多くの言語を見ても、なかなか見られない表現だと思う。そして、正しくこの言葉は、アラブ社会では生活の潤滑油だと言える。

アラブ人はあまり謝らない民族だと良く言われる。表面的にはそう見えるのかもしれないが、実のところは違う。確かに彼らは日本人のように謝罪表現を使うのは得意ではない。

しかし「自分が申し訳ないことをした」、「相手に悪いことをした」という反省の気持ちも、もちろんある。ただ相手に事情を話せば、きっと許してくれるだろうと情に訴え、相手に自身の状況を理解してもらおうというのが先になってしまうのだ。

自分がかけた迷惑について、アラブ人が必死で、言い訳ともとれる事情を相手に説明するのは、相手に誠意を示したいからなのである。

それは善意の表明にほかならず、それ以上の意味はない。その言葉そのままを受け取ってもらいたい。

アラブ人は言ってみれば、自尊心によって支えられている。そのため、自尊心を傷つけるようなことだけは絶対に避けた方が良い。いい逃れのための言い訳ではなく謝罪を誠心誠意の気持ちで表しているのだ。相手のアラブ人が謝ってきたら追及せず、人知の及ばぬ災難として彼らの事情とそのおわびの言葉を甘受できるようになれば、きっとアラブ人との付き合いがうまくいくに違いない。

日本では、約束を守らなかったり、決まり事や規則を破ったりした場合、特別な事情をのぞいて、その理由は言いわけとみなされることが多い。日本での生活に学ぶことは多かったが、その中で、一番身にしみて教わったのが、どんな場合にでも、「言い訳」だけはしないことだ。しかし世界の価値観はいろいろ。もしあなたがアラブへ行ったらその言い訳こそがあなたの窮地を救ってくれるだろう。

アラブ人取扱説明書 謝罪篇

1)相手のアラブ人が待ち合わせの時間に遅れるなど、迷惑をかけるようなことをした場合、まず、そのわけを寛大な心で聞いてあげよう。

2)たとえ、相手のためによかれと思っても、厳しく追及するような言い方は避けよう。

3)ビジネスの取引や職場関係などの場面では、約束を守らなかったり、仕事を手抜きしたりなどした場合、相手の言い分やその事情に対し一定の理解を示しながらも、あくまでも知っている者同士として相手の人柄を評価すると共に、態度の改善を丁寧に頼むこと。

例:

日本人(上司): 5分も遅刻だぞ!

アラブ人(部下): あの、申し訳ありません。下にはちょうど、駐車場が開いていなくて、ほかのパーキングを探していたもんで・・・・

日本人(上司): あ、そうだったんだ。この辺ってほんとに車を止める場所がないよね。そうしたら、次から、家から少し早めに出てきた方が良いかもしれない。私もね、そういうことがよくあるから、いつもそうしているんだ。とにかく、君に期待しているんだぞ。

道端や電車の中:

A:(相手の肩にぶつけたなどのとき)マアレッシュ、アナ　アスィーフ(ごめんなさい、すいませんでした)

B:マアレッシュ、マアレッシュ　(気にすることはない。大丈夫、たいしたことではない)

4)たとえ規則や常識だからと言って、自尊心の強いアラブ人のプライドを言葉などで傷つけるようなことだけは絶対に避けた方が良い。

アルモーメン アブドーラ氏

1975年、エジプトカイロ生まれ。2001年学習院大学文学部日本語日本文学科卒業。03年同大学の人文科学研究科博士前期終了。現在、同研究科で日本語とアラビア語の対照について研究。専門は言語学・日本語とアラビア語の対照研究。

大東文化大学国際関係学部講師。NHKテレビアラビア語会話講師。NHK・BS放送アルジャジーラニュース通訳。

現在、外務省などの公的機関の通訳、映画や演劇などの翻訳、講演会や執筆などでも精力的に活躍。天皇皇后両陛下、アッバス大統領(パレスチナ)、スルタン皇太子(サウジアラビア)など多くの首脳や要人の通訳を務めた経験を持つ。主な著書に「読める書けるアラビア文字練習プリント」(小学館)、「アラビア語が面白いほど身につく本」(中経出版)

アラブ人
取扱説明書

連載

アラブ流の挨拶

大東文化大学国際関係学部講師　アルモーメン アブドーラ

アイロンの思い出

たった2、3日だけの海外旅行なのに、旅先で困らないようにとお気に入りの洋服や使い慣れた日用品、好きな本など、あれもこれもトランクに詰め込んで持っていく人、1カ月の滞在でも小さなスーツケース1つだけの人、海外生活に必要だと思うものは人それぞれだ。

日本に来てから今年でもう11年目になるが、エジプトを離れ、日本に来る時のことを振り返ると、私はなぜかアイロンだけは忘れないようにして大事に持ってきたことをよく覚えている。アイロンは持ってくるにはかなり重かったのだが、当時、飛行機の片道チケットしか買えなかった私には、クリーニング代など日本での生活費を少しでも抑えようと、アイロンを本当に大事に、大事に運んできたような記憶がある。

「アイロンだなんて」とこれを読んで笑う人もいるだろうか。アイロンと言えば思い出すのは、エジプトにいたころの「アイロン屋のおやじ」だ。生まれ育ったカイロの、とある地域の一角に先祖代々からやっている「アイロンがけ」の老舗「makwagi」、いわゆるクリーニング屋さんが私の家のま向いにあった。そこには、唯でさえ人懐こいエジプト人に輪をかけてユーモアのある人懐こい「アイロンがけのおやじ」が毎日汗を垂らしながら働いていた。そんなおやじさんと出会ったのは、私が11歳の時だった。きっかけは、簡単、お使いである。子供のころから、お使いでクリーニングに出しにいくとき、わたしにとってアイロン屋のおやじさんとおしゃべりをするのがいつも楽しみだった。「こうするとアイロンがけは上手くなるよ」、「きのうのサッカーの試合負けたな、君のチーム」、「ちょっとこれ知っているかい?」、内外を問わず世の中のことから将来の夢まで、いろいろな話をよくしていたものだ。本当におしゃべり好きの楽しい人だった。彼がしゃべりだすともう最後…という感じで、短いときでも10分ぐらいは余裕でかかり、調子が良いときは、何と45分ぐらいもおやじさんのオンステージ。トークが止まらない。毎回、会う度に最高記録の更新である。家のすぐそばだということもあって、家を出入りするたびに店の中から、おやじさんの力強い声が私の方に真っ先に飛んできて、「元気かい?お茶、どうぞ」といつも愛想よく挨拶してくれていた。おやじさんは私にだけでなく、近所の知っている人、見ず知らずの人にもよく声をかけ、目に入る人みんなに挨拶をしていた。

アラブ人と日本人の挨拶

そのおやじさんは「挨拶は、善徳なり」という言葉が口癖だった。

「挨拶」は、「文化」である。その文化的発想で、人をつなげる大きな力となる。アラブ世界を代表する挨拶は「アッサラーム・アライクム」である。これは、基本的には、道端でもどこでも出会ったどんな人にでもする挨拶の言葉だ。しかし大抵の場合この言葉一言では終わらない。何かと挨拶したがるアラブ人は、通常の「おはよう」、「こんにちは」、などはもちろん、「お元気?ご家族はどうですか?仕事は順調なの?」などと延々と続いてゆく。こうして、人に会ったときに、積極的に相手との仲間意識を強めていくような挨拶表現が本当にバリエーション豊かなのである。日本人の挨拶観とは少し異なるかもしれないが、挨拶する相手が毎日会っている人であるからこそ、熱烈に時間をかけて挨拶し、身振り手振りで表現し、いかにあなたに会いたかったかと熱く伝えることが何より大切なのである。

挨拶するのは、知っている人たちだけに限らない。知っていようがいまいが、道端で通りすがりの人、エレベーターや待合室などで目が合った見ず知らずの人でも、「アッサラーム・アライクム」と、とっさにちゃんと挨拶する。これはとても大事なアラブ式のエチケット。これができるととても円滑にコミュニケーションが図れるはずである。

アラブでは長い場合は延々10分くらいも挨拶していることがある。会ってしまったら最後、である。

はじめてアラブ人に接する日本人は、「アラブ人の挨拶は、なぜこんなに長い

のだろうか」とめんどうに思うかもしれないが、アラブ人は人懐っこくて、人情第一である。誰でも歓迎し、そしてすぐに友だちとなれる。

私は毎週の大学の講義で、学生たちにアラブ式の挨拶をし、その思いを熱弁しているのだが、言葉の勉強というのは、理屈だけでは、説明のつかない世界なのだなとつくづく思う。

日本の毎日の生活で、愛想よく誰にでも挨拶したいという人懐っこいアラブ人としての自分と、「距離こそ、融和」と考える日本人を相手に、表情を最小限にとどめた日本的挨拶を演出している自分を適当に使いこなそうとするのは私にはとても骨の折れることである。

エジプトからあんなに苦労して持ってきた大切なアイロンはとうの昔に壊れて失くしてしまった。しかし私の耳に心地よく残っているアイロンがけのおやじさんの声「挨拶は、善徳である」は今も色あせることなく、ここにある。

つづく…。

アラブ人取扱説明書　挨拶篇

1)　アラブ人は3度の飯よりおしゃべりが好きな民族である。そのため、挨拶を交わす際にも、慌てず急がず、そして丁寧に相手自身の健康、家族、仕事、などというふうに1つ1つについて「～はどうですか」と尋ねるのが大事な礼儀の1つ。

例:　A:アッサラーム　アライクム(今日は / あなたが平安であるように)
B:ワアライクムッサラーム(今日は / あなたも平安であるように)
A:お元気ですか。
B:ええ、アルハムドッリッラー（神様のおかげ様で、元気ですよ)
A:アルハムドッリッラー、御家族もお元気ですか。
B:ええ、アルハムドッリッラー、みんな、元気にしていますよ。
A:「お子さんは大きくなったんでしょうね」、「お父さんの今の具合はどうですか」…などというふうに相手の家族のことを取り上げて聞くと良い。そうすることで、互いの距離がぐんと縮まり、親密さも増す効果あり。
B:最近は～自分、子供、両親がね～。
(たいてい互いの近況などをにこやかに語り合う)。
A:仕事も順調でよかったですね / 勉強もうまくいっていてよかったというふうに、にこやかに愉快な言葉を添えると和やかさが増す。

2)　挨拶対象となる人は相手が人間なら無限である。また、アラブ社会では、挨拶の言葉をかけることはアラブ式エチケットの基本中の基本ですので、同じ空間に居合わせている人間に挨拶するのが礼儀上の鉄則となる。
また、もし数人の人間が集まっている場所である場合、外からその空間に入ってきたあなたからみんなに「アッサラーム　アライクム」と声をかけよう。
さらに言えば、挨拶するのは、会ったときや特定の場所に入ったときなどだけではなく、実は、その場所を去るときも、「アッサラーム　アライクム」などと挨拶するのも大事な心遣いの1つです。これは日本で言えば、その場を去る時によく使われる「失礼します」というような感じです。

例:(エレベーターや待合室に入ったとき)
A(1人):アッサラーム　アライクム
B(数人がいる場合):ワライクムッサラーム
(そのとき、それを聞いた周りの皆がほぼ同時に返事するのが一般的な光景)

3)　ビジネスや商談などの場合、挨拶まじりの雑談には抜群の効果がある。
ぶっきらぼうな人だと思われたくないのなら、まず、健康や、家族など互いの近況から話を切り出し、にこやかに語り合おう。

もこもこアラブ君
© アルモーメン　アブドーラ

アルモーメン　アブドーラ氏

1975年、エジプトカイロ生まれ。2001年学習院大学文学部日本語日本文学科卒業。03年同大学の人文科学研究科博士前期終了。現在、同研究科で日本語とアラビア語の対照について研究。専門は言語学・日本語とアラビア語の対照研究。

大東文化大学国際関係学部講師。NHKテレビアラビア語会話講師。NHK・BS放送アルジャジーラニュース通訳。

現在、外務省などの公的機関の通訳、映画や演劇などの翻訳、講演会や執筆などでも精力的に活躍。天皇皇后両陛下、アッバス大統領(パレスチナ)、スルタン皇太子(サウジアラビア)など多くの首脳や要人の通訳を務めた経験を持つ。主な著書に「読める書けるアラビア文字練習プリント」(小学館)、「アラビア語が面白いほど身につく本」(中経出版)

アラブ人
取扱説明書

地図が読めないアラブ人、道を聞けない日本人！

大東文化大学国際関係学部講師　アルモーメン アブドーラ

あるテレビ番組のロケでエジプトに行ったときのこと。ロケ班にとって初めてのエジプト取材だったため、出発する前に番組の担当ディレクターは張り切ってエジプトのありったけの地図を買い占め、撮影予定のロケ地をマークし、試験前の受験生のようにしっかりと準備してくれた。撮影の初日は、カイロの中心部にある旧市街を撮影する予定だった。撮影場所の住所とその周辺地域の地図はしっかりと揃えた。後は運を天に任せるのみ。そのときロケ班の誰もがそう思っていた。

「これってどうやって見るの？」

向かった先は、カイロの旧市街の近くの老舗である。

車を１時間走らせて撮影場所のある地域に向かったのだが、探している場所が全然見つからない。こうなったら、車を降りて歩いて探すほかないと判断した私は率先して、その店があると思われる方向へ向かった。途中で何度も足を止めて通りすがりの人々に尋ねながら探し回った。周りは喫茶店やお土産屋さんなど、店ばかり。

店の前で水タバコをふかしているおじさんに声をかけ、自分が今いる場所の正確な位置を何とか知ろうと躍起になってディレクターがあわてて地図を広げ、身振り手振りを織り交ぜた英語で、「私たちが今いる場所はこの地図のどの辺ですか」と彼に尋ねた。おじさんはディレクターの広げた地図を見た瞬間、まるで難しい難題を出されたかのように、血相を変え、そして地図をさかさまに持ちながら、「これってどうやって見るの？」と真剣な表情で言った。聞けば、地図なんて学校の教科書で見るぐらいもので、地図を見ながら、場所を探すなどはありもしない話だというのである。しかたなく、別の人に聞いてみると「地図なんて見るのは久しぶりだね。多分この辺じゃないかな。でもやっぱり地図なんて分からないよ」とやっぱりこちらの人も同じだった。そして私達の困り果てている姿を見かねたのか、その周辺のお土産屋さんの従業員らしい男性が私たちに近づき、「お手伝いできる？　どこを探しているの？」と聞いてきた。「実は、ここへ行きたいのだけど」と話すと、「あ～、ここか。確かにこのあたりだったな。ここをまっすぐ行って、突き当たりを右へ曲がると、その店があったような気がするな」と教えてくれた。

もこもこアラブ君
© アルモーメン　アブドーラ

書く文化と話す文化

喜びに堪えぬもののように、よかった、よかったと何度も繰り返しながら、教えてもらったとおりに道をたどっていったのだが、その喜びも束の間。彼の言う「突き当たる場所」もなければ、もちろん、探しているその店もないということが判明した。

しかたなく、再び聞き込み調査を開始することにした。探し回って一時間。途中で道を教えてもらった人たちみんなに、地図を見せても、チンプンカンプン。首をかしげ、誰一人として分からない始末だった。そして、やっとの思いで撮影場所の店にたどり着いたのだった。するとずっと黙り込んでいたディレクターがその重い口を開き、「アラブ人って地図が読めないね」とアラブ人の粗末な案内への不満を私にぶちまけたのであった。

日本人は地図が得意であると評判である。行き当たりばったりで出会った人間に直接道をきくのが苦手な日本人は、国内や海外、どこへ行こうにも、地図を片手にその場所を探すことができるようである。生活必需品だといっても過言ではないだろう。しかし、地図を描いたり、それを頼りに行きたい場所を探すような習慣は、文化によってその使いこなせる能力が全然違うようだ。日本人は何でも書きとめておきたがる民族だという。地図を描いたりするのも同じ気がする。一方、アラブ人は、どちらかといえば、ものを書くよりは、話す方が得意な民族だと思う。地図が描けないのもその性格の表れの１つかもしれない。事実、一般のアラブ人にとって地図は、まるで社会科の授業や世界の天気予報以外に見たことのないようなものなのである。

正直、私も来日したばかりの頃、地図を渡されて大学の場所を説明されたときに、場所への行き方よりも、まずは地図の使い方を教えてほしいとひそかに思ったことがある。

助け合いの精神

アラブ人には、地図をうまく使える能力が備わっていないが、困った人をほっておけないという気持ちに関しては、彼らに勝るものはないだろう。そうした精神は民族としての誇りでもある。自分が持っている力が十分でなくても、必要とされている情報が確かなものでなくても、「いいえ、知りません」と相手をがっかりさせるよりは、「少しでも助けてあげよう。自分の知っていることだけでも教えてあげよう」と思うのがアラブ人である。「とりあえず力になりたい！」。とっさにわいてくる気持ちに身を任せるのがアラブ人の重要なメンタリティの１つだといえよう。

無事に初日の撮影を終えて、いざ帰ろうかと思ったそのとき、後ろから「すいません、バス停はここから遠いのですか」と１人の年配の女性が尋ねながら、私たちの方に寄ってきた。私はディレクターに笑いながら言った。「どうやら今度は私たちが案内する番ですね」。そしておばさんに、私たちについて来るように言った。

すると不思議なことに、ついさっきまで、ご機嫌斜めだったディレクターが、さっきの場所探しの苦労はまるで忘れたように、道を尋ねたおばさんと片言の英語で嬉しそうに話している。どうやら２人はすっかり意気投合したようである。２人の後ろ姿を追いながら、私は、みんなが地図を見た瞬間の険しい顔や、一生懸命私たちを手助けしようとしていた姿を思い出し、何か愉快なような、笑い出したくなるような、けれど、その底は何だかほんのり温かいような、そんな気持ちで胸が一杯だった。

アラブ人取扱説明書 道を訊く篇

―「地図より人に聞くべし」―

アラブ世界では、行きたいところや探している場所にたどり着くのに、地図を使うよりも、人々に直接聞き、耳寄りな情報を得ることの方がはるかに便利である。

あえて断言する。ほとんどのアラブ人は地図が読めない。ある特定の場所をアラブ人と確認するとき、地図はほとんど役に立たない。その地図が外国語で書かれているからとかいう問題ではない。アラビア語で書かれていても通じないものは通じない。

―「何らかの事情で相手のアラブ人が困っている様子」―

そんなとき、あなたが「私には何かできますか」その相手に親身になって、そしてできるかぎりのことをして助けてやりたい気持ち、また力になりたいという心持ちを言葉などで伝えることがまず何より大切。何しろ、困った人を助けるのがアラブ人の流儀の基本だからである。

A:アッサラーム　アライクム
B:ワアライクム　アッサラーム
A:～というお店を探しているんですけど、知りませんか？
A:そうですね、そのさきの次の交差点を曲がると、そこにあるかもしれない。
ちょっと待って、あそこの雑貨屋のおじさんに聞いた方が早いかもしれない。

こうして、「～かもしれない」、「似た名前を見たような気がする」、などのように、確かでない情報であっても、まずは相手にそれを伝えて、一緒に探そうという姿勢が何より大切なこと。

アラブの町を歩くと、いろいろと聞かれることが多い。道はもちろん、「ここの近くに～を売っている店って知りません？」や「今は何時ですか」などのような事柄がその代表的な例の１つ。知らないときは、こちらの地元の人間じゃないとか、あそこの店なら、きっと（多分でも）知っているとか、おそらくその方向にあるとか、相手には少しでも役立つような何らかの情報を提供するように心がけよう。

アラブ人には、地図のことがとにかく読めないし、また描いてあげても、それを使いこなすノウハウが分からない。道などを教えるときは、まっすぐ、右、左、曲がる、目安になる店や看板などを使うと、相手に分かりやすい説明となる。

アルモーメン アブドーラ氏

1975年、エジプトカイロ生まれ。2001年学習院大学文学部日本語日本文学科卒業。03年同大学の人文科学研究科博士前期終了。現在、同研究科で日本語とアラビア語の対照について研究。専門は言語学・日本語とアラビア語の対照研究。

大東文化大学国際関係学部講師。NHKテレビアラビア語会話講師。NHK・BS放送アルジャジーラニュース通訳。

現在、外務省などの公的機関の通訳、映画や演劇などの翻訳、講演会や執筆などでも精力的に活躍。天皇皇后両陛下、アッバス大統領（パレスチナ）、スルタン皇太子（サウジアラビア）など多くの首脳や要人の通訳を務めた経験を持つ。主な著書に「読める書けるアラビア文字練習プリント」（小学館）、「アラビア語が面白いほど身につく本」（中経出版）。

アラブ人取扱説明書

アラブいろいろまめ知識　小テスト　マナー篇

「日本へ来てどのくらいになりますか。」私を見てこう質問しない日本人はいないくらいである。

「4年になります、8年になります、11年になります。」

と私はその度に答えたものだが、不思議なことにいつも嬉しい気持ちがする。

言葉に不慣れな短期の旅行者であれ、その言葉に通じた長期の滞在者であれ、人は外国で多くのものを目にし、さまざまな解釈をしようとする。

特に、私のような、外国の地に11年以上もの歳月、そして今もなお、暮らし続ける経験のある人間の場合は、目にするものにしろ、またそれらを解釈することにしろ、特別なものさしで物事を見ている。

ところで、どうしてマナーが必要？私は、そんなに堅苦しい話ではなく、お互いが心地よく過ごすためだと思う。考え方、感じ方が違っていてもある一定のルールの下では共通の行動を取ろうとすることは、一人では生きていけない人間の大切な営みだと感じる。

礼儀作法というものは、まったく習慣によるところが大きく、外国生活に飛び込んでみると、そのギャップにびっくり仰天してしまうことは一度や二度ではないだろう。

そこで、今回はアラブ文化のマナーを基本とした、「アラブいろいろ豆知識・小テスト」を実施します。

もこもこアラブ君
© アルモーメン　アブドーラ

①部屋やエレベーターの出入りで、人と居合わせたら、アラブでは、「どうぞ、○側から」と「お先にどうぞ」に相当する意味の表現で、先に通るよう勧めます。その方向は「右」「左」のどちらでしょうか。

A　右側　　B　左側

②友達と食事に行き、食事を終えて店を出ようとしています。支払い方は、どちらがアラブ人らしいでしょう。

A　割り勘　　B　どちらかがおごる

③素敵なファーティマさんの家に招待されました。あなたは家に着いて、手土産に買ってきたケーキを差し出しました。アラブでは、もらったお菓子などを持ってきた本人の前であけて出すでしょうか。

A　出す　　B　出さない

④人と会ったり別れたりする時、握手をしますが、相手が女性の場合、男性から手を出して良いでしょうか。

A　良い　　B　だめ

⑤アラブの町を散歩していると、20代の男性2人が男同士で手をつないで歩いています。これは良くあることでしょうか。おかしなことでしょうか。

A　よくあること　　B　おかしなこと

⑥サイード君の家に招待され、おいしい料理でもてなされました。さあ、どちらがアラブ式マナーでしょう。

A　残さず平らげる　　B　一口、二口分残す

⑦久しぶりにムスタファさんに会ったら、だいぶふっくらしていました。親しい間柄なので、「ちょっとふとったじゃない？」と冗談を言っても良いでしょうか。

A　良い　　B　ダメ

大東文化大学国際関係学部講師　アルモーメン アブドーラ

①解説：イスラム的な考え方になりますが、右はよいほうとされています。このことだけに限らず、物を渡すときなども右手を使うのが普通です。

②解説：日本では当たり前だったりする割り勘ですが、アラブでは＜ケチ＞という言葉は絶対言ってはいけない言葉の一つ。親密さや自分の気前の良さを表したいため、会計の前でどちらがおごるか口論になるほどです。割り勘ということはめったにないでしょう。

③解説：日本では招かれた家にお茶菓子を持って行き、楽しく談話しながら皆で頂いたりしますが、アラブではもらったものをそのまま出すということはありません。招いた方が用意していたお菓子でもてなします。

④解説：アラブの紳士たるもの、こちらから勝手に女性の体に触りません。女性が手を差し出せば握手をしますが、差し出してこなかった場合はほほ笑んで挨拶を交わします。

⑤解説：これには驚いてしまう外国の人が多いようですが、アラブでは男性同士で手をつなぐことは普通のことです。親しみを込めた大切な仲間というような感覚で小さな子供からおじさんまでいろんな世代の男性同士、女性同士が手をつないでいます。逆に人前で男女が手をつないでいる光景のほうが、まれなのです。

⑥解説：日本ではお米の一粒まで大切に残さずきれいに食べるという美しいマナーがありますね。出したほうもきれいになったお皿を見て、おいしく食べてもらえたと満足するでしょう。しかしアラブでは考え方がちょっと違います。残さずきれいに食べると足りなかったのかしら？と思われてしまうので一口、二口分残すのがアラブ式マナーです。

⑦解説：アラブの人は日本の人ほど体形の微妙な変化を気にしません。そのため自分ではなんとも思っていなかったことを唐突に指摘されて驚いて、ちょっとショックを受けてしまう人もいます。外見のこと、特に体重に関わるようなこ　とはたとえ親しい間柄だとしても避けるのが無難でしょう。

さあ、問題はこれで終了。何問正解できましたか？

4問以上間違えてしまったあなた、残念ながら赤点です。課題として寝る前のほんのひと時、問題をもう一度読んでみましょう。忙しい日々のことは忘れてリラックスして読みましょう。夢の中でアラブの街中へ旅行できるかもしれません。

アルモーメン アブドーラ氏

1975年、エジプトカイロ生まれ。2001年学習院大学文学部日本語日本文学科卒業。03年同大学の人文科学研究科博士前期終了。現在、同研究科で日本語とアラビア語の対照について研究。専門は言語学・日本語とアラビア語の対照研究。

大東文化大学国際関係学部講師。NHKテレビアラビア語会話講師。NHK・BS放送アルジャジーラニュース通訳。

現在、外務省などの公的機関の通訳、映画や演劇などの翻訳、講演会や執筆などでも精力的に活躍。天皇皇后両陛下、アッバス大統領（パレスチナ）、ズルタン皇太子（サウジアラビア）など多くの首脳や要人の通訳を務めた経験を持つ。主な著書に「読める書けるアラビア文字練習プリント」（小学館）、「アラビア語が面白いほど身につく本」（中経出版）。

アラブ人
取扱説明書

お肉があふれる日、身も心も満タンにアラブの街

大東文化大学国際関係学部講師　アルモーメン アブドーラ

何処を振り向いても羊

「犠牲祭、おめでとう！」この時期、街はこの挨拶でにぎわう。イスラム圏では犠牲祭はとても大切にされている行事である。

でも犠牲祭って一体なにをする祭りでしょうか。名前は知っていても、その内容まで知る人は案外少ない。

犠牲祭の時期、町は羊の鳴き声と人々が互いに声を掛け合い、たいへんにぎやかである。

たくさんの人々が羊肉、牛肉を買い求め、(日本では考えられないかもしれないが、なんと家庭で羊を丸々一頭さばくのも珍しいことではない)貧しい人々とも、また親戚なども、へだてなく分け合う。精肉店は大忙しだ。

毎年、大人も子供もみんな犠牲祭(イード)が近づくのを心待ちにしている。これは日本の「早く来い来いお正月」の心境に似ているかもしれない。家族や親戚と犠牲祭を過ごし、親戚との絆を互いに確かめ合う時期なのだ。

何年か前、私が取材をかねた帰郷でエジプトに到着した日は、ちょうど犠牲祭の前日だった。街の雰囲気は、私にとってまさに「懐かしい」の一言だった。子供も大人もみんな楽しそうに街を歩いていて、そのにぎやかな雰囲気に私も久しぶりにわくわくしてしまった。

街のいたるところに動物園さながら、羊たちの群れがいる。町のあちこちの肉屋はきらびやかに飾り付けし、華やいだ雰囲気である。

肉を買いに来ている客がきらびやかな精肉店の前に列を作っていた。

「一体、何が始まるの？アラブの人ってこんなにお肉を食べるの？」日本からの取材班の一人はその町の光景にびっくり仰天していた。

犠牲祭とは、アラビア語では「イードゥ　アルアドハー」と呼んでいるが、イスラーム教徒にとって特別な意味を持つものである。

犠牲祭は，巡礼が行われるイスラーム暦(イスラーム暦はカレンダーの暦とは異なるので毎年の開催時期は、ずれる)の「ズー・アルヒッジャ月」の10日から13日にかけて4日間続く。その間は、人々は新しい服などを着て、友達や家族連れで行楽地へ遊びに行ったり、互いに訪問しあったり、祝いの言葉を交わして喜び合う。

そして10日はメッカ巡礼の最後に当たり、巡礼者は動物犠牲を捧げる。これに合わせてイスラーム世界では各家庭でいっせいに犠牲を屠るのだ。

犠牲祭の精神の継承

百聞は一見にしかず。

取材班のメンバーと町の羊市場に行ってみた。そして、羊を買いに来た客に聞いてみることにした。

こんな質問だ。

「どんな肉を買っているのですか？特別なものですか。」すると「モハンマド預言者のスンナ(言行録)に基づいて、条件を満たした羊(ウドゥヒヤ:ささげるもの)を選ぶのよ。犠牲物を選ぶときは、条件があるから、肉の質とか何とかではなく、ちゃんと預言者モハンマドのスンナ(言行録)が決めた条件を満たしたものじゃないといけないの。アッラーのために捧げるものですからね。」と詳しく教えてくれた。

また別の人にも「犠牲祭で羊を買って捧げる目的は何ですか？」と聞いてみると、「まず、この行為はモハンマド預言者のスンナに基づいたものです。それから、恵まれない人々を助けるためです。犠牲祭では、モハンマド預言者がしていたように、羊を買って、人々に分け与えることによって、すべての人々が幸せな気持ちになります。そして、これによって社会福祉の実現にもつながるのです」という答えが返ってきた。

肉を買いに並んでいる中年の男性にも「動物の犠牲を捧げる意味は何ですか」と聞いてみた。彼はこう言った。

「この祭りの目的は肉を食べることではありません。犠牲祭は、社会全体でやる社会福祉運動のようなものです。羊など犠牲を屠るのは恵まれない人たちや親族などに分け与えるためで、正しいイスラームの精神はまさしくそこなのです。恵まれない人に食べ物を分け与え、互いの気持ちをつなげ、みんな幸せになり、家族や親戚との絆もより強くなるのです。互いを思いやることこそがイスラームなのです」

私は彼らの熱弁にとてもジーンとしてしまった。形式だけが残る祭りもあるけれど、犠牲祭の精神は今でもみんなの心に息づいている。そのことに私はとても感銘を覚えたのだ。

イスラームが大切にする精神をかみしめながら私は久しぶりの犠牲祭を思いっきり楽しんだのだった。

記事を書いているうちに楽しかった犠牲祭の雰囲気や、ジュージュー焼いた羊の香ばしい匂いを思い出して真夜中なのにおなかがすいてしまった。

※イラスト訳:鳥インフルエンザに注意

アラブ人取扱説明書 祭り篇

「外国人は、犠牲祭が何だかわからないし、肉を食べる祭りだろうとでも思っているのじゃないかな」と決めつけているアラブ人は少なくないようである。アラブ人のハートをつかみたい人にお勧めするのは、上のような先入観を覆すような発言や行動をすることである。さりげなく言うのが肝心。

(a)アラビア語で挨拶してみよう

外国人:イード　ムバーラク(祝福されたまつりをの意)

㊟こういう種のまつりのときに互いによく交わしあう決まりのあいさつ言葉

アラブ人:イード　ムバーラク(返事はこのように返されるでしょう)

(b)以下のような内容のコメントも好印象　↓

助け合うのは本当に素晴らしいことですね。

犠牲祭では具体的な行動をもって人々がつながることの大切さを、改めて感じますね。

イスラーム教徒にとって、人に善を施すときに一番大事なことは、誰にも知られないような形でその善を行うことである。誰に？またどのように？など具体的に詳細を明かさずに秘密に保つのが、善を施す上で、重要な精神なのである。犠牲祭のときも、同様。周りの人に知られない形で、恵まれない人や生活に困っている人に善を施すのが重要なポイントとなる。そのため、人のそうした行動が話題に上ったときは、質問したり、具体的な説明を求めたりするのは、避けるのが無難。

「善は隠せ」という精神から、アラブ人は基本的に、人助けや人のためになるような行動をとった場合にはそれらの行動を主張せず、伏せておくのが美徳である。

日本人:この間、学費が足りないCさんに、金を貸したって？

アラブ人:まあ、まあ、そんなのはよいでしょう。(話をかえます)

日本人:(アラブ人の友達に)今度おごるよ。

㊟この種の表現はアラブ人にとってあまり印象の良くないものである。

誰かを快くおごりたいのなら、先に宣言することなど必要なく、

相手が気付かないところでおごる意思を示すのがアラブ人なら、常識中の常識。

人に何か良いことがしたいときは宣伝するなというのがアラブ人。

犠牲祭といえば、お肉。だが、子供にとっては何よりの楽しみとなるのはお年玉をもらうことだ。もしイード(まつり)のときに友人から家庭に招待される機会があったら、異教徒で外国人のあなたでも、友人のアラブ人のお子さんにお年玉をあげると、その家庭のお子さんにはもちろん、その友人にも、あなたのその行動で、あなたの株がぐんと上がるだろう。

ちなみに、お年玉のことを「アルイデッヤ」と呼んでいる

あなた:これはあなたのためのものですよ、と子供に手渡す。

アラブ人の子供:最初は子供が断ろうとする素振りを見せるのが行儀の良い子の証拠だが、基本的にはありがとうと言って受け取るのがこういうときの礼儀の一つでもある。

1975年、エジプトカイロ生まれ。2001年学習院大学文学部日本語日本文学科卒業。03年同大学の人文科学研究科博士前期終了。現在、同研究科で日本語とアラビア語の対照について研究。専門は言語学・日本語とアラビア語の対照研究。

大東文化大学国際関係学部講師。NHKテレビアラビア語会話講師。NHK・BS放送アルジャジーラニュース通訳。

現在、外務省などの公的機関の通訳、映画や演劇などの翻訳、講演会や執筆などでも精力的に活躍。天皇皇后両陛下、アッバス大統領(パレスチナ)、スルタン皇太子(サウジアラビア)など多くの首脳や要人の通訳を務めた経験を持つ。主な著書に「読める書けるアラビア文字練習プリント」(小学館)、「アラビア語が面白いほど身につく本」(中経出版)。

〈MEMO〉

〈MEMO〉

〈MEMO〉

発 行 所　公益財団法人 本田財団
104-0028 東京都中央区八重洲2-6-20ホンダ八重洲ビル
Tel.03-3274-5125 Fax.03-3274-5103
http://www.hondafoundation.jp
発 行 者　山 本 雅 貴